
一杯の珈琲

武智舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一杯の珈琲

【Nコード】

N61450

【作者名】

武智舞

【あらすじ】

夏目恭一は高校生活に飽きていた。いくら後輩の高津美帆が入学してからずっと、昼休みに教室に遊びに来ても、それは変わらなかった。しかし、そんなある日、髪の真っ白な女性に出会った。

第一話（前書き）

もしよろしければ感想や評価ポイントなど募集しています。

感想なんて、一言で十分、大好きだー！

そりゃ、長文もうれしいけどね

第一話

第一話

こんな華のない高校生活を俺は望んではいなかった。しかし、中退するにも中途半端な時期でもある。それが高校二年の冬に抱いた俺の感想だ。中退するぐらいなら、卒業証書は貰って置かないと思う。そのために、そのただけに進学したのだから。

今日も昼休みの教室に、一つ学年が下の高津美帆が俺に体を向けて前の席に座っていた。その席の持ち主である友人は、今は俺の肩に腕を掛けている。美帆がこの高校に入学してから、ずっとこんな調子である。こんな時だけクラスメイトが周囲に頓着しないことに感謝すると、ある友人に話すと「調子が良いな」と笑われた。

高津美帆は、俺が中学二年の時にコンパで知り合った同じ中学出身の後輩である。一七〇を少し超えた長身だが、顔が可愛く性格も可愛い、そしてセンスも良い。でも、やっぱり俺より目線が高いのは、プライドめいたもので気にはなる。

しかし、俺よりも頭が良いはずの美帆が、どうしてわざわざこの高校を選択したのか未だ定かじゃない。合格通知を見せられて初めて知った俺は、その後何度かそれとなく聞いてみたが、曖昧な返答ばかりで、最後に聞いた「私に受験勉強は似合わないですよ」というのも、信じあぐねている。いや、一応予想はつくのだけれど、はっきりとはしてない。

「……つまらねえな」

なにげなくこぼすと、美帆がきたきたと言わんばかりに、すごい笑顔を浮かべた。そしてソプラノボイスで言う。

「せんぱい。私が楽しい高校生活にしてあげましようか？」

「言うなあ。何、楽しませてくれるの？」

「はい。すっかり寝ぼけたせんぱいの青春を叩き起こしてあげます」
からかい半分の言葉に、何故かどことなく意気込む美帆を見て、俺は若干困ってしまった。こんな熱血キャラだったか、こいつ？

「どうしてよそ見するんですか？ 喜ぶところですよ、せんぱい」

美帆は見かねたのか、ふて腐れて、私を見なさいと言うように顔を寄せてきた。

「今更じゃないか？」

「言ってくれてもいいじゃないですか」

「うれしいよ」

「……………全然そうは見えませんか」

やっぱり口先だと睨まれたが、気恥ずかしいものがあるから勘弁したい。しかしこのままだと全速力で機嫌を損ねられて、今以上に里織にねちねちと言われそうだ。面倒くさい。

「そんなことないぞ。すげえ、うれしいから」

「……………わかりました」

美帆は渋々引いてくれた。むしろ尾を引きそうだったが、割り切っておこう。

「ところで」

「あ！ なかったことにしましたね？ ひどいです！ こんなひたむきな後輩にする態度じゃないですよ！」

噛みつかれた。でも、俺は気怠げな目をした。すると美帆が口を尖らせたから、俺はやっぱり悪ふざけが入ってたなと呆れた。

「うれしいのは本当だって」

「……………やっぱり、おざなりです」

満更でなさそうに見えた。

昼休みが終われば美帆は名残惜しげもなく自分の教室に帰ってい

った。少しは後ろ髪引かれるようにしてほしいのは、俺のわがままだ。振った奴が言う台詞ではない。また「節操ない」と怒る里織さとりの顔が目につく。しかし、昼休みが終わると、なんとなくつまらなくなる。昔からの友人がそれぞれ別の高校に行ってしまい、だけど美帆がその分、暇つぶしになってくれてるからだろう。

放課後になると、シフトを入れてない日で友人と寄り道する気分でもなかったから、そのまま帰宅した。部屋に入ってすぐ私服に着替えて、ベットに倒れ込み、もぞもぞと動いて仰向けになった。次第にまぶたが重くなった。

目が覚めると、窓から見える景色はカーテン越しでさえ、かなり薄暗いとわかる。オーソドックスな目覚まし時計は、五時十三分を指している。

気怠いながら寝汗を流しにシャワーを浴びた。着替え直す頃にはすっかり目が覚めていた。

朝食を買いにコンビニに足を運び、スタバのコーヒーとエクレアを買った。雑誌で美容師が洒落た朝食をとっているのが掲載されていたが、田舎のコンビニだとこれぐらいが精々だ。

コンビニを出ると空は一層澄んでいた。薄っぺらい雲と蒼い空が、薄暗い辺りとは違ってきれいだ。バイトで深夜まで長引くことがあっても、こんなに朝早く起きることがないから新鮮で、凍るような空気が体の中を刺激する。

継ぎ接ぎの路面を歩いていると信号に引っかかった。家からコンビニまで一つしかない信号だ。立ちつくしていると、隣に小柄な女性が横に並んできた。少し気になって何気ない風を装って一瞥してみた。

ぱつさりショートのおとんど白に近いブロンド。そして痩せすぎなほど細いプロポーションに、ぷっくりとした唇が印象的な美人だ。澄ましたような表情だから、年齢は判然としない。足下には古ぼけ

たトランクがある。

俺は裾ポケットをまさぐって、煙草があることを確認して声を掛けた。

「すみません」

「おはよう」

「あ、どうも」

淡泊な口調と見当はずれな返しに、思わず俺は会釈した。先を促すような彼女の視線に、くしゃくしゃになった煙草の箱を見せつつ、よく吟味した台詞を口にした。

「火がなくて、ライターがマツチがあれば貸してくれませんか？
家にすっかり忘れてしまつて」

すると、彼女はちよつとだけ首を傾げた。怒っているようにも呆れているようにも見えた。

「……………君、高校生でしょう？ 若いうちから吸つてると、すぐに体を悪くするよ」

「もう、やめられませんか。想像できませんね。マナーはきっちり守つてますよ？」

言つたが、彼女は素っ気ない面持ちですでに俺を見てさえないない。内心苦くなつた。信号はもう青になっていた。

「はい」

突然の声に顔を向けると、目の前にライターが浮かんでいた。思わず顔を引く俺を横目に、彼女の口元がほころんでいるのが見えた。そして危うい拳動で掴み損ねて、路面を叩くライターの音が耳を打つ。拾つた頃には、横断歩道を渡りきつた彼女の背中と赤く灯つた信号が目映つて肩を落とした。

失敗したなー。

そう思つたが、すぐにあきらめた。

でも、授業中から思い直して、昼休みになつても悔しかった。気

分的には頭を抱えている感じ。

「あーあ、退屈ですね。ずっと頭を抱えて、何を悩んでいるんですか？」

指摘されて、実際にそんな状態だったことに気づいた。誤魔化すように、見よがしと言わんばかりに顔を寄せて、下から睨み付けてくる美帆に「暇つぶしに何かしてくれよ」と言った。

「たまには、せんぱいからしてくださいよ」

呆れたように顔をしかめた美帆は、ストローをくわえてレモンテイーを啜る。

今日は美帆側に立ちつくす友人も顔をしかめてやれやれと首を振った。

「だよなあ。課題だって人任せだもんな夏目って。何かやれよ」

「そうですよ。いつも私ばかりです」

ここぞとばかりに美帆は友人の言葉に乗っかってつついてきた。面倒だ。

俺がうんざりしていると、不意に美帆が真面目な口調で尋ねてきた。

「ところで、せんぱいまた何かありました」

「ん」

またというのに少し引かかったが、それよりもどう答えたものかと口づぐんだ。

「少し待て考えてる」

「はい」

途端に美帆はににこと笑って首を傾げた。意外と現金な奴だ。しかし、ここで余計なことを言っただけ腐れても、なんだかつまらない。

「……楽しそうだなあ」

友人がつまらなさそうにしていたが無視だ。というより邪魔だった。

「お前は席外せよ。邪魔だから」

「ひで」

「はいはい」

渋谷友人は別のグループに紛れていった。そんなやりとりをしていると、大体まとまってきた。しかし、目の前に襟を正した美帆の視線が居心地悪くて話しづらい。

「今朝、綺麗な人に会ったんだけどな。ちょっと取っかかりに失敗して軽く後悔してな」

案の定、美帆は女として如何なものかと言うほど思い切り吹き出した。

「逃げられちゃったわけですね？　せんぱいにしては珍しく失敗したんですか。あ、でも、慎重なようでアバウトだから、せんぱいらしいですか」

笑いをこらえながら言うのが腹立たしい。

「笑いながら言うな」

「おかしいのだから、しかたないですよ。せんぱいのせいです」

低い声色で言ったが、しばらく美帆の発作が治まる気配はなかった。

しゃっくりのように時折笑いをぶり返しながらも、ようやく落ち着いてきた頃を見計らって再び口を開いた。しかし俺の声色はかなり低い。

「で、散々笑ってくれたけど、女の視点だどう思う？」

「わー、かなり腹を据えかねてますね、せんぱい」

当たり前だ、と思う俺と、当たり前か、と顔色に出す美帆の視線が合う。変なところでシンクロしないでいいと、ますます俺はふて腐れた。

「そうですね。さとり先輩ならバカでしょうって言いますね」

少し考え込んで余計なことを言う美帆に、「そうじゃないっ」と釘を差した。

美帆は、へへへと笑う。誤魔化すときの美帆の癖だ。付き合いのない奴だと、普段の笑顔と区別がつかないだろうけど。差し当たり、

舌が出てるか出てないかの違いだろうか。出ていたら誤魔化している。

「まあ、あいつならやりかねないけどな」

いや、絶対やる。心の中で断言しておいた。

「はい。うーん、でも、せんぱいが思わず声をかける人ですか。会ってみたいですわね。どんな感じの人だったんですか？」

「あ？ そうだなあ。白に見えるぐらいのブロンドで、頭は丸っこくって背が低かったな。年齢は不詳だった」

「そんな細かいところまでよく覚えてますね……」
呆れ半分感心半分という調子で美帆が笑う。

「ブロンド好きなんですか？」

「いや、別に。髪型にはこだわりあるけどな」

「ああ、せんぱいはそっちでしたわね」

「ところで、今回の俺に失敗ってわかる？ わかるなら言うてほしいんだけど」

「それはやっぱり軽いからです」

思い切り吹いた。即答な上に、簡潔な言葉がツボだった。でも半分は苦笑いだ。言い訳はしておきたい。

「俺が女の付き合いには真剣だったことは知ってるだろ？」

「確かに真剣ではありますわね。でもあきると露骨に付き合いがずばらになるじゃないですか」

さすがによくわかつている。詰問口調ではないものの、はきはきと言われたら言い訳もしくい。

追い打ちを掛けるように続ける。

「それに見る人によつては結構軽薄ですよ、せんぱいって。私も最初、せんぱい軽薄そうに見えましたもん。今だから言いますけど」

本当に今だからこそ言えるな。俺は苦笑した。

「ちよつと傷つくんですけど、それ」

「でも」

美帆はにっこりと微笑んだ。

「今はせんぱいが楽しい人だっってわかってますから。というか知らなかったら付き合っってませんでしたし」

「確かに」

妙な具合で納得して、笑みがこぼれた。

「けど、せめてメルアドだけでも交換したかった」

滅多に見せない情けないことを口にする、くすりと美帆が笑う。からかうような色を含んだ目をしていた。別れてから遠慮が全くなくなってきたなと思う。

「それはそれでハードルが高いですよ。変なところで女性のことわかってませんね。あ、いや、抜けてる、ですね。お互いにある程度の信頼があって初めて成り立つんですよ？」

「ああ、もう、わかったわかった」

うざったそうな口調であしらう仕草をしても、笑顔を引つ込めない美帆は少しして、すくつと立ち上がった。

「じゃあ、そろそろ私、教室に帰りますね」

「はいはい、じゃあな」

俺のおざなりな返事も、今回ばかりは美帆も笑って流した。まあ、いつもの引つ張るようなやりとりは、実際が悪ふざけなのだけれど。それにしても、廊下側の席に座ってから俺は、野暮ったいセーラー服のスカートをひるがえして、廊下をぱたと駆けていく美帆の足音をいつも聞いているうちに、まるで女は猫のようだと思ふようになった。なかなか詩的ではないかなと、自画自賛してみたり。あの澄ました顔の友人なら鼻で笑ってくれそうだが。

今日はシフトの日だからバイト先に直行した。今はファーストフードのバイトで、更衣室で制服に着替えた。お世辞にも容姿が良いとは言えないが、持ち前の人懐こさで客だけでなくバイト仲間からもそこそこ評判が良い。

そういえばと思い出す。通っている高校はアルバイト禁止だから、もちろんこれは無断アルバイトであるが、高校から遠いからすつかり高を括っていた時に、よりもよって生活指導の教師が来たとき

は、顔に出てないだろうなと思うほど驚いた。しかし何度か顔を合
わせても聞かれなかったからバレてないと思う。思いたい。

だけど、そろそろここも潮時かなと最近思う。なぜなら最初の頃
は時給が高くおごつてもくれると気に入っていたのだが、新しく入
ってきた本社員のせいで職場がおかしくなった。そいつを発端に仲
間内が険悪になったのだ。近頃、嫌気が差している。

十時にバイトを終えて更衣室で着替え終わると裏口に置いてある
自転車に跨った。ペダルに力を入れて景色がゆっくりと流れ始め
ると、体から熱気やこびりついた様々な臭いのはがれ落ちてゆくよう
な感覚を覚えた。体を撫でる冬の寒風がこの時ばかりは心地よかつ
た。

冬休みに入ってから数日が経った。

ほのかな朝の気配に目を覚ますと同時に、スライド式の携帯がメ
ロディと共に画面を光らせた。メールの発信者は美帆だった。欠伸
をしながらベットのうえで胡座をかき、緩慢な動きで文章をなぞる。

内容は簡単に言えば誘いだ。何度かメールでやりとりしてる内に、
今でもそれなりに付き合いのある悪友の武田賢志^{たけだ けんじ}だけでなく、高校
進学後はほとんど疎遠になっている田沢里織^{たざわ さとり}も来るということがわ
かった。口にはしないが結構楽しみた。

数日後、約束の十分前に駅前に到着したが、まだ誰も来ていなか
った。見知らぬ頭頂部の禿げた脂ぎった中年がじろりと睨め付けて
きたが、気にせずロータリー沿いのベンチに腰掛けた。

待つ間、ベレー帽の具合を確かめたり、耳にヘッドホンを付けて
音楽を聴いたりして暇をつぶす。

賢志の彼女とその友人も来るらしいが、どんな奴だろうと気にな
る。想像できないから余計にだ。そもそも賢志に彼女が出来たこと
が驚きだ。顔はそこそこだが、性格に難のある奴だから。それにし
ても、

「やけに遅い……」

しびれを切らして、ぼつりとこぼす。石畳の路面がひしゃげた煙草やたんで汚れて余計に憂鬱だ。手慰みに携帯を数度スライドさせていると、不意にヘッドホンを取り外された。跳ねるように顔を上げると、仁王立ちの里織が俺を見下ろしていた。背が低いから見下ろすというほどではなかったけれど。

「……………ねえ。メールでもいいから返事をしてくれないかしら。わざわざ私が探す羽目になったじゃない」

相変わらず冷淡な口調で言ってくる。しかもヘッドホンを放るおまけ付きだ。俺は苦笑した。

「俺のせいだよ。お前メルアドや電話番号を変えたなら教えるよ」

「だったら、美帆ちゃんか賢志くんでもいいじゃない。そこまで頭回らない？」

「極端なお前に言われたくないな」

「何？」

「気にするな」

かすかに顔をしかめる里織を適当にあしらって、もう一度携帯を操作した。

「あの二人にもメールを送ったはずなんだけどな」

「そんな話聞いてないわ。みんな待ってるから早く行くわよ。その時二人にでも聞いて」

投げやりに言うのと里織はさっさと背を向けて歩を進めていった。

俺は立ち上がってすたすたと歩いて肩を並べる。

それにしても、すんと下ろした長く重たい黒髪は相変わらずだ。懐かしいとさえ思う。小さな白い顔も、泣き黒子も、スポーツに向いてそうな長い手足もそんな気持ち強くさせる。

でも、何よりもまず気になることがある。

「なんで制服？」

「悪い？」

「そこで制服のチョイスがわからない」

にべのない反応はこの際気にしない。少し苦笑したが。

里織の服装は、上下とも暗い青を基調とした、派手ではないけどハイセンスな制服だ。上はボレロで、下はハイウエストのスカートというのが一番近い。里織の場合、それに加えて赤のタイツを穿いている。

「わからなくて結構よ。そんなことより早く歩いて」

「随分な言い方ですね」

目すら合わせない反応に俺は苦笑した。昔にも増して、きつい物言いだな。

どうやら集合場所は俺がいた場所から駅を挟んだ反対側だったみたいだ。すっかりしてた。俺以外は全員集まっているらしく、その中に見覚えのない女が二人、賢志の近くにいた。

俺に気づいた美帆が、気後れした様子で俺に近づいてきた。

美帆らしいショートパンツのルックで、長身で意外と肩幅のあるから、さらりと羽織ったモッズコートがよく似合う。でも、せっかくスタイルがいいのだから、一度ぐらいラインを出したコーディネートもしてみればいいのにな。

「ごめんなさい。私、気づきませんでした」

「いいって、気にしてないから。気づいてなかったのは、美帆だけじゃないし」

拜むように謝る美帆から目をそらして、賢志を見た。背が高く筋肉質な体格の賢志は、澄まし顔で片目を閉じて頬をつり上げる。

「俺のせいにするなよ。聞かなかったお前の責任だろ。勘違いするな」

さすが幼稚園からの付き合い、遠慮のない言いぐさだ。

美帆は今度は里織に体を向けたが、里織が先制をとった。

「気にしてない」

「……………よかったー。っと、せんばい？」

ほつと胸をなで下ろした美帆に、里織が唐突に抱きついた。美帆は目を丸くしたが、すぐに里織が脇をくすぐり始めて楽しそうに悲鳴を上げながら身をよじった。

「そっちの二人はお前の彼女と友達？」

「ああ、そうだ」

「……いや、紹介してくれよ？」

それっきり、ぷつちり黙りこくった賢志に苦笑する。賢志は気怠そうに隣の女に首を回すが、当たり前のことだろうと思う。

「俺の彼女の福本春音^{ふくもとはるね}。こっちが春の友達で、神楽絢子^{かぐらあやこ}な」

賢志は一番横にいた、美帆とはまた違った人懐こそうな女と、その隣の三つ編みをカチューシャ風にしたお嬢様然とした女と順に指差した。

福本と呼ばれた女が緩い笑顔で自己紹介をした。

「こんにちは。福本春音つていますー。けんじくんの彼女でーす。そしてこの子は私の親友の神楽絢子。可愛くない？」

ハスキーボイスと間伸びた調子が印象的だ。賢志とペアルックなのか、ショートライダーズを羽織っている。足下はバルーンのようにふくらんだキュロットスカートで包んでいる。

福本は自己紹介の直後、不意打ち気味に神楽という仏頂面の女に抱きついた。うりうりという言葉が聞こえそうなほど、頬などに密着している。

「これがこいつらのスキンシップだ。口出しするなよ」

「俺がそんな無闇なことを言う奴でも、思う奴でもないことぐらい知ってるだろ」

慣れた風にこっそり耳打ちしてくる賢志に心外だと睨み付ける。俺はそんな狭量の男じゃない。何年の付き合いだ、お前。

それと、さつきから視線を感じる。何気なく目を配ると、俯きがちの神楽という女と目があった。不躰と言えるほどの眼光を感じたが、直後、神楽は慌てたように視線を落とした。

「なら、いいけどな」

「そのすげえ上から目線が鬱陶しいんですけど」

「お前だって人のこと言えないだろ」

「お前とは違う」

「ねえねえ」

ふと、呼んできた福本に顔を向けた。神楽の頬や肩に密着してるが、気にしないでおく。好奇心が強そうな笑顔で俺を値踏みすると、
「けんじくんから聞いてるよ、ナツくん。確かにセンス良いよね、その帽子とか。かわいいっ」

唐突だったけれど、うれしいことを言われて、テンションがあがる。顔には出さないが。

「そんなうれしそうな顔するなよ、人の彼女の言葉で」

さすがに賢志にはバレバレだった。しかし、人を食ったような顔でからかわれると、本気でうざったいな。

そこで俺は目敏くあるものを見つけた。

「福本さん。その腕時計、賢志のか？」

福本の細い手首に巻かれた、ごつい文字盤の腕時計を目線で指差す。すると、福本は可愛らしく頷いた。

「うん、そうだよ。あ、呼び捨てでいいよ。名前はだめだけどね。けんじくんが拗ねるから」

「おい」

指差された賢志が、いたずらっぽく微笑む福本を、じろりと睨み付けた。余計なことを言うなと目で語るが、全員にバレバレだ。むしろ、抵抗すればするほど面白い。

福本は気にした様子もなく、ぺらぺら喋ってくれた。

「せっかくだからって、けんじくんのお母さんにクリスマスパーティーに誘われて、その後、空き部屋に案内されたの。けんじくんのお姉さんの部屋だったから、ベットがあってちょうどいいわって。で、夜遅くになると、けんじくんが尋ねてきてね。いろいろと話していた時に、このごつい腕時計が目に入って食い入るように見ていたら、けんじくんがいるかって。それで頂戴したわけなんだ」

賢志が無理矢理口を塞ぐまで、福本は赤裸々に話してくれたのだ。
った。

冬休みにも関わらず、いつも通りグランシティと呼ばれるショッ
ピングモールには活気がなかった。客足があまりなく、店員も店頭
も覇気がない。開店当初のあぶれるほどの賑わいは、もう見る影も
なかった。

俺たちはまずゲームセンターに向かった。俺たちは自然と、それ
ぞれグループを作って、時間を指定して散らばった。俺は美帆と里
織と一緒にだった。

しかし里織の何気なくも鋭い視線があつて、なんだか楽しめない。
俺は逸らすように美帆に話を振ることにした。

「これだと、いつものメンバーだよな」

「ですね」

美帆はにこにこ笑いながら同意した。

適当に店内を見て回ると、さすがにここは人が多いなと思った。

基本的に学生が多いが、ゲームに熱中する大人も少なくはない。む
しろ最近では、大人の客が多いとバイトしている友人から聞かされて
いるから当たり前の風景なのかもしれない。

奥に行くほど学生や大人の数が増えていくのが、如実にわかった。
人気なものほど奥にあるらしく、耳の調子が狂いそうな音や、まぶ
たの裏に焼け付くような光がごちゃ混ぜになつた喧騒も酷くなる。

そして俺は刺激は好きだが人混みは大嫌いである。

「せんぱい。もうこの辺りで引き返しませんか？　ここまでうるさ
いと逆に楽しめないです。さとり先輩はどこかに行っちゃいました
し、私は入り口のところのシューティングゲームの筐体がいいで
す」

「そうだな。そうするか」

美帆の提案には俺も賛成だ。里織がいないことだし、楽しまない

と損である。あいつとはまだ喧嘩しているから、いたらすごい疲れ
る。

「それにしても、ここだけ人が多いですね。他は全然空いてるのに」
入り口に向かって歩いていると、美帆がそんなことを言い出した。
俺も軽く同意する。

「ゲームの筐体が多くて、ちょっとした雑貨店なんかがあって、ゲ
ーム疲れや買い物した後に休むのにちょうどよくて気軽に入れる店
があるの、この辺だところぐらいだろ？ それに同じ市内でもここ
から遠い奴でも、ここ近くに駅があるから電車で来たらいいしな」
「学生としてはうれしい立地ですね。でもせんぱいは、やっぱりM
市ですか？」

からかうように聞いてくる美帆に、特に考えず「まあな」と答え
る。

しかし思い直して、俺は笑って言った。

「さすが、よくわかってるな。そんな先輩思いな後輩には何かおご
ってやるよ」

「え、本当ですか？」

「千円以内ならなんでもいいぞ」

期待感に目を見開く美帆にすっかり釘を差すと、不満げな顔をさ
れた。

「高校生ならかなりの上限だろ。何が不満なんだよ？」

さすがにこれ以上は苦しいから、俺の口調も少しきつくなる。す
ると、美帆はぶつぶつと言った。

「よく考えてみると、なんだか私、釣られた魚みたいです。体のい
いえさに食らいついたら最後、せんぱいにまた何かされそうです。
やらしいですよ、せんぱい」

思ってもみない言葉に、俺は呆れたような面白いような複雑な感
情を抱いた。でも、胸を隠すように体を抱いて少し逸らし、上から
睨み付けてくる様は可愛いと言えるかもしれない。けれど、こうい
うのはやっぱり女の背が低い方が絵になるよな。

「それはそれとして、シューティングがしたいんだろ？　なら早く行こうぜ。こんなところで話していたら時間がもったいない」

そついうわけで、俺たちは話を切り上げてさっさと入り口に向かった。

筐体に乗ってコインを投入して美帆はグリップを握り画面に銃口を向けた。

美帆は意外とガンを扱ったシューティングゲームが大好きだ。結構な頻度で俺はこいつに、ゲームセンターへ付き合わされているから、それをよく知っている。

暇だから俺もコインを投入して参戦することにした。が、即ゲームオーバー。三つのライフはあっという間に削れてしまった。

俺はこの手のゲームが苦手だ。

そんな俺を尻目に美帆は次々とゾンビを倒していくから、思わず苦笑がこぼれた。

「せんぱいは全然うまくならないですねー」

「うるさいな。そのうち記録塗り替えてやるよ」

「そういうセリフはゾンビを五体は倒してから言ってくださいよ」
癪だから言い返しても、美帆は余裕綽々と笑うから余計腹が立った。プライド的なもので許せないので早々と頭を切り替えて、コインを投入した。

「せんぱいの場合、撃つときに射線がずれてるから当たらないんですよ」

隣で美帆が何かを言っているが聞こえない。俺はゾンビをしつかり狙って引き金を引いた。

ゲームオーバー。

美帆が呆れていた。

「せんぱい？　私の話、聞いてました？」

「うるさい。こういうのは楽しめればいいんだよ。外野がうるさいと気が散るだろうが」

ぶつくさと不平を口にすると、やれやれと美帆が肩を落としてい

るのに気づいて苛ついて、「なんだよ」と、噛みついた。

「間違ってないだろ」

「そうですね……。せんぱいが人の話を聞かないことは、先輩たちにはちゃんと聞かされてますし、私もわかってますからやっぱりいいです」

「おい。それはそれでむかつくんですけど？」

まるで俺が駄々をこねているような言い方だ、それだと。

「その憐れむような目もやめてくれませんかー？」

「そうですね、今更ですし」

こんなひどい後輩だっただろうか。絶対、里織から悪い影響を受けてるな。やめてくれ。

俺が乱暴に銃を突っ込むと、美帆があからさまに口を尖らせてきた。

「もうっ。いじけないくださいよっ」

「あ？ いじけてない。あきたただけだ」

眉をひそめて、俺は背を向けると歩き出した。退屈だからその辺をうろつくことにしたただけなのだが、美帆は勘違いしたらしく文句を言ってきた。

「そののどこが違うんですかあ。もうっ」

背中越しに見ると、美帆はかなりふくれていたが気にせず歩を進めることにした。あきらめたように美帆が筐体を放り出して俺と肩を並べて睨んでくる。しかし、これも放っておくことにした。

そうしていると、不意に思い出した。前に似たようなことがあった。その時は、俺の目の前で全てのステージをコンプリートした直後で、自慢げに語る美帆がちょっと鬱陶しくて、美帆を他の得意なゲームに誘って気が済むまで勝ちまくったんだ。その時にいた賢志に「大人げないな」と、揶揄されたこともついでに思い出した。

しかし、それを振り払うように俺は美帆に声を掛けた。何故なら、あまり思い出たくないことだからだ。

「やっぱり、こういうときはカラオケじゃないかな？」

「……………また、そればかりですね……………」

「いいだろ？　なら他に何かあるか？」

せつかく逃げた方向で美帆にげんなりされた。良い提案だと思っただのにな。そう思った俺が不満げな顔を見ると、美帆はますます顔を苦くしてくれた。

「いつもそうだと、さすがにあきてきますよ。せんぱいぐらいじゃないですか、毎日通つても楽しめるの」

「いや、さすがに俺でも毎日通つたらあきるから」

「十分通つてます。それに褒めてないですよ……………」

それでも美帆は折れなかったが、むしろますます嫌気が差しているが、どこことなく諦めてる感もあった。

「だから他に何かあるなら、そつちでもいいけど、ないんだろ。だったら、カラオケでいいじゃん。無難だろ？」

「……………そうですね」

納得のいかない顔をする美帆はそんな曖昧な言葉で濁した。

まあ、俺も無理強いはいしたくないけどさ。他がないなら譲れない。あつたとしても譲れない。でも、さすがにそんな嫌な顔をされると傷つくなあ。

しかし、俺は尽力を惜しまず、しつこく美帆を勧誘した。美帆に「……………そんなところばかりエネルギーを使うんですね、せんぱいつて」と、皮肉られたが気にしない。というか、それがどうしたと開き直る。

「いざ、入ってみればすぐに楽しめるって。いつもそんな感じだろ？　ほらほら」

「そうかもしれませんが……………。やっぱり、せんぱいだけな気がします。というか、他のみんなの意見もありますよ」

ちよつとずつだが、満更でもなさそうな反応を美帆は見せるが、結局もつともらしい正論で否定的な結果になるという、そんなやりとりが続いた。

賢志たちを見つけるまで、大方そんな感じだった。

「やっぱりアニソンか」

「何？ 文句ある？」

「別にないけどさあ」

口を濁すと、ますます里織の視線が険しくなったが、今更だった。俺たちは結局、カラオケに来ていた。あれだけ渋っていた美帆が、福本と意気投合して、あっさり寝返ったのは結構イラツときだが、この際だから棚上げしておこう。楽しめればそれでいい。

室内はこざつぱりとしたそれなりの部屋で、ソファァーがカラオケセツトの向かいと、そして入り口の向かいにそれぞれあり、自然と俺と賢志で分けられて座っていた。しかし男は隅の方である。

「この中で一般のアーティストに詳しいのは、俺とお前だから仕方ないだろう。田沢は俺たちとはジャンルが違いすぎる」

「アニソンしか聞かないからな」

「馬鹿にしてる？」

「いや？ そままでいくと尊敬する」

「恭一くんに褒められても嬉しくないから不思議」

食ってかかった次は罵倒である。毒舌も限度があると思うのだが、言つたつて無駄だろう。というか、真顔で、しかも冷淡な口調で言われると殊更傷つくんですけど？ さすがに腹が立つんですけど？ 「ナツくんって、すごく楽しいね。狙ってる？」

「これがこいつの素だ。あまり期待しすぎない方がいいぞ」

「ひどい言い様だな。空気呼んでももう少し引つ張れよ」

「引つ張つたつて何も出ないだろう？」

言い返すことが面倒くさくなつて俺は口をつぐんだ。その間、福本はずつとくすくすと笑っていた。盛り上がっているのは良いけど、いまいち納得できない。

俺と賢志の会話が一通り終わったのを見計らつてか、ちょうどいいタイミングで福本が俺たちを交互に見ながら尋ねてきた。

「ねえ、ナツくんって歌上手だよな。けんじくんも滅多に歌わないけど上手なんだ。ナツくんもたくさん曲知ってるって言ってたけど、けんじくんが歌が上手なのはその影響？」

「確か、俺も賢志も元々アーティストはそれなりに知ってたから、特に影響されたって言うのはないかもな。ああ、でも、好きなアーティストを勧めたこともあるから、やっぱりあるかもな」

「別に影響されてないと思う。こいつには特に」

「じゃあ、歌を上手に歌えるコツってあるの？ 私下手だから、いつもけんじくんに聞いてるんだけど、教え方下手なんだよ。だから全然上手にならないの」

そう言っただけで福本が溜息をこぼすと、賢志が言い訳がましく口をついてきた。

「人のせいだよ。そう言うけどな。こいつだって、そんな変わったものじゃないぞ」

「する前に断言するな」

「そうだよ。初めから諦めていたら何もできないよ。けんじくんの皮肉は嫌いじゃないけど、こんな時に使うのは違うと思うよ」

心強い福本の弁護が聞いたのか、賢志はふて腐れたがそれ以上は何も言わなかった。ただ一言、「まあ、がんばれ」と口にしたただけだった。

「うん、がんばるね」

そう言う福本を見ると、俺が場違いな気がした。

「せんぱいもがんばってくださいな」

こっそり耳打ちしてくれる美帆の心配する調子が嬉しい。里織が「大げさ」と言う言葉が水を差したが。

早速福本に教えることにしたが、瞬きもなくじっと見つめられるとやりにくかった。

「そんな難しいことじゃない気がするけど。口を大きく開けて、発音をしっかりすれば結構良いところまでいけると思うぞ？ 声きれいなんだし」

ほとんど癖でさりと口になると、賢志が珍しくにやりと笑った。

「なんだ？ 人の彼女にナンパか？ 良い度胸してるな」

「してねえよ。だったらお前が教えろ、ケチつけるなら」

「珍しく正論ですね、せんぱい」

他にも余計な茶々を入れる奴がいたが、睨んで制した。しかし、

それは美帆だけではなかった。

「もしかして、けんじくん。それって嫉妬？ だったらうれしいな」

「言ってる」

たえ彼女であつてもノリが悪いようだ。

すると女の視線がすごいことになっていた。

「けんじ先輩、たまには素直になっても罰は当たらないと思いますよ？」

「……男って情けない」

「お前ら……。好き勝手なことを……！」

賢志の口調がわなわなと震えている。口々と言う中、福本がぼつりとトドメを言った。

「……たまには、恋人らしいことしてくれてもいいじゃない……」

明らかな泣き真似だが、口調は悲哀に満ちてるから、あながち嘘にも見えない。下手に口出せない賢志は、絶句していた。

福本が寂しそうに目をうるうるさせる。しばらくして無言だった

賢志は諦めた。

「……わかった。俺がきっちり指導する。ほら、もう少し傍に来い」

「やったっ」

福本は顔を輝かせて、進んで体を寄せて、説明する賢志に熱心に頷いていた。

というか、俺は噛ませ犬か何かか？

暇を持てあました俺はリモコンで曲を入れて歌うことにする。

すると不意に、パシャツと乾いた音が聞こえた。景色を携帯で写す俺には耳慣れない、カメラのシャッター音だ。

「良い歌いっぷりだね」。被写体としては最高だよ」

見ると頬のゆるんだ福本の手には、いつの間にか、一眼レフが握られていた。その重厚すぎる品に俺は真顔で聞いた。

「それって自分の？」

「そうだよ。写真部に入ってるの。私が部長で、けんじくんは副部長。けんじくん腕が良いんだ」

「こいつは賞を取るほどの腕前だけだな」

惚気る福本を、賢志が親指で指差す。

「じゃあ、福本さんは将来は写真家ですか？」

美帆が無邪気に言うと、とたんに福本が言い辛そうに首をすくめた。

「んーとね。まだ決めてないんだ」

「どうしてですか」

「それだけの腕があるのにか？」

「そうだけど……。やっぱりそれだけだと、だめな気がするんだ。

どう説明したらわからないけど。それで、どうしようってね？ 迷ってる」

「ようするに、勇気とか意気込みとか、そんなのが足りなくて後一歩が踏み出せないんだよ、こいつは」

「確かにそうだけど！ そんな身も蓋もないまとめかたしないでよ！」

肩を怒らせた美帆が盛大に噛みついたが、賢志はどこ吹く風といった調子で肩をすくめた。ささやかな嫌がらせなのだろう。

「はあ……。そうだ、みんなを撮ってあげるよ。やっぱりこういうときはカメラの出番だよな」

福本は、女の子の子した笑顔を浮かべて、宣言通り写真撮影を始めた。

里織が進学した先は、県内だけでなく、全国でも有数の進学校である。しかし、ここからでは電車で一時間をかけて、バスに乗り継

いでさらに一時間の距離だから、里織は県庁所在地のM市のマンションで一人暮らしをしているらしい。

その都合で俺たちは早めに切り上げることにした。駅前まで里織を送って、そこで賢志たちとも別れた。

「福本さんって面白い人でしたね。けんじ先輩とは相性が合ってたうな人でした」

「まさか、あいつに彼女ができるなんて、ちょっと驚きだけだな」

「……それはひどいと思いますよ？」

美帆は苦笑する。

自転車をつきながら、肩を並べた俺たちは、街灯でぼんやりと照らされた路面を歩いていった。冬もそろそろ本格ムードに入ろうとする気配。空を上げば、澄み切った黒が一面に広がっている。見てるだけで寒々しい。

「でも、神楽さんがあまり喋ってくれませんでしたね。人見知りする人だったんでしょうか？ 少し残念でした。また機会があれば、話してみたいですね」

すぐに浮き浮きする美帆は、本当に前向きな奴だ。そういえば、ずっと前にそれを言ったら、里織に「あんたの方が前向きよ。あんたほど馬鹿で前向きな奴、見たことない」と散々に言われた気がする。

「まだ冬休みだし、大丈夫だろ。確かに里織と違って全く会話に参加してなかったな」

「さとり先輩はマイペースですから。後、せんぱいの方に向いてましたし。絶対調でしたね」

「迷惑だけだな。口を開けば俺のことを罵って、しつこいよなー、あいつ」

げんなりしてると、美帆がくすくすと笑った。

「仕方ないですよ。怒らせたせんぱいが悪いです」

「慰めもないのかよ」

励ましてもくれないとは、着実に良い性格になってきたな。

「あいつ、一体何に怒っているんだろうな？　何かした、俺？」

試しに尋ねてみると、美帆は思い耽るように視線を下げて、俺に向かって小首を傾げた。

「……したんですよ、何かを」

「何をだ！」

ほとんど反射で突っ込んだ。ここまでくると苦笑してしまう。すると、美帆は顔をしかめた。

「せんぱいが聞いた方が早いと思いますけど？　……わかりました。

私がそれとなく聞いておきますね」

「サンキュー」

あつさりと俺の真意に気づいて応えてくれる美帆はいい女だと思う。まあ、これで悩みの種は消えたも当然だろう。

「せんぱいのそんな暢気なところ、ほんと良くも悪くも羨ましいです」

「どういうことだ？」

「そのままの意味です」

美帆の顔は、もう付き合ってられないというものだった。そんなにひどいのかと、さすがに心配になってくる。

何事もなかったかのように歩いていると、美帆が震える体を抱く。吐く息がとてつもなく真っ白だ。もしかしたら、煙草の煙よりも濃いかもしれない。

「それにしても、冷えますねー。そろそろ冬も本番でしょうか？」

「時期的にそうだな。底冷えする前に帰らないと、霜焼けするかも」

「えー？　それはいやですよー。私って肌弱いから、なると結構長引くんですよー」

嫌そうに顔をしかめた美帆は、想像したのか頂垂れた。ここまで弱々しい美帆も珍しく、同情してそれとなく元気づけておく。

美帆はげんなりしたまま顔を上げた。

「肌の強いせんぱいが、こんなとき恨めしいですよ」

「そう言われてもなあ」

ふくれる美帆に苦笑する。面倒くさい以前に俺にはどうしようもないことだ。この場合はまず間違いない。

「雪は好きですけど」

「雪は滅多に降らないからな、ここは」

「だから余計に残念なんです！」

鬱塞となる美帆は殊更落ち込んでいくが、やっぱり俺にはどうしようもないことだ。

「せんぱいは雪が積もったらうれしいなって思ったことないんですか？」

「あるけど？」

「なら雪合戦はありますか？」

「雪と言ったら定番だろ？」

「そうですね……」

それっきり美帆は口を閉じたが、質問の意図がつかめず俺は怪訝な顔をした。

「意味がわからないんだけど？ 結局何が言いたいわけ？」

それでも何も言わない美帆に俺はさらに詰め寄った。すると、渋々といった感じに美帆が口を開いた。恨めしそうに見下ろしてくる。「せんぱいにだって、それだけ雪に思入れがあるのに、現実主義だなあと思っただけです。普段はロマンチストなくせに、変なところで辛辣ですね。というか、興味がないことには、意外とドライですね。……逃げてません？」

「逃げてない。でも、雪なんて滅多に振らないところで長く暮らしているんだから、当然の反応だろ？ いくら俺でも夢と現実の区別はつくからな？」

珍しく俺が正論を言って文句をたれる美帆をなだめる構図だった。思わず俺は調子に乗った。

「お前ってほんと夢見がちだよな。ああ、馬鹿にしてないからな？ むしろ、良いことだと思うぞ」

「……わざわざ説明しなくてもわかってますよ。そのぐらい、せん

ぱいのことはよく理解しています」

口を尖らせる美帆は年相応にこどもっぽい。

そんな中身のあるような不像な、割と投げやりっぽい会話をしていると、いつの間にか美帆の家に近づいていた。そして到着すると、すでに美帆は切り替えていた。

「そうだ。次はさとり先輩の部屋に行きましょう、せんぱい」

突飛すぎだ。俺は嫌な顔をした。

「なんでだよ。行ったら、どうせ追い返されるからぞ。さすがの俺でも、それは遠慮する」

「わあ……。いつもは相手の都合もお構いなしに訪問する、せんぱいのセリフじゃないですねー」

呆れすぎたといった具合に目を見開かれても、むざむざ美帆の言葉に賛成などしない。

あからさまな逃げ腰の俺に、仕方ないなあと美帆が溜息をこぼした。

「いや、俺は悪くないからな？」

「せんぱいが原因の天罰ですよ、間違いない」

訴えてみるが、何の効果もなかった。にべもないと言う。

「行くのも億劫だ。だから行かない。俺は絶対行かないから」

「……………いいです。せっかく、せんぱいが家まで送ってくれたんですから、今日は引いておきます。せんぱい。これからもよろしく願いますね」

「じゃあな」

にこやかに、そんな脅迫めいた挨拶を区切りに、俺は軽く手を振る美帆に腕を上げてペダルに足をかけた。

「あ、そういえば」

「ん、何？」

「今ちょうど両親、家を空けているんです。明後日ぐらいには帰ってくる予定なんですが。お父さんのわがままで。だから泊まっていますませんか？ 夕食もごちそうしますよ」

さっきの話でこう来ると、ふつつ何か裏があると勘ぐるが、この後輩に限って何もないだろう。直球勝負がポリシーの美帆のことだから、これは単純な好意での誘いのはずだろう。

「どうします？」

「……せつかくだし、そうさせてもらうな」

美帆に気後れした様子もない。俺にも断る理由がなかったから、ありがたく受け取った。

寝覚めは微妙だった。そして欠伸を噛みしめる。視界はぼんやりとして、まぶたをぐりぐりと揉む。辺りは薄暗かった。

同じベットの隣には、うつ伏せに寝た美帆が静かに寝息を立てていた。つまり、ここは美帆の部屋である。あまり女の子らしいとは言えない、逆に言えばボーイッシュな部屋だ。見慣れた光景でもある。

何気なく、美帆の頬にかかった数本の髪の毛を、撫でるように掻き上げた。美帆はこそばゆそうに喘いだ。

それからじっとしていても仕方ないと思い立って、刺激しないようにベットから這い出ると、美帆の肩にそっと布団と毛布をかぶせた。そして、シャワーを浴びに行った。

こんなことでシャワーなどを借りるのも、一度だけでないから使った形跡を残さないのは手慣れたものである。

そうして身支度を終えて部屋に戻ったとき、美帆はまだ枕に頬をうずめていた。もうしばらくは起きないだろう。起こすのも悪いだろうから、俺はストールを巻きメモを書き残して部屋を後にした。

時刻はまだ八時を回ったぐらいで、途中、コンビニに寄った。今日はエスプレッソとサンドイッチを見繕い、近くの特徴もない公園に入って、ベンチに腰掛け朝食をとった。

食べ終わると、ゴミは丸めて茂みに投げ捨て、しばらく俺はベンチに腰掛けたままだらしていた。そして、携帯をブルゾンのポ

ケットに滑り入れると立ち上がって、自転車のグリップに手を掛けた。

不意に見覚えのある姿が見えた。俺は躊躇なく駆けだした。

「どうも」

肩を並べてまず俺の口から出たのは挨拶だ。基本である。

「この前はありがとうございました。……覚えてます？」

何の反応もないから心配になってきた。もしそうだと、変人扱いされてしまう。

「……………ええ」

たった一言だったけれど、それで十分ほっとした。

彼女は会った時と同じ服装であった。特徴的な白のブロンドも、手元の古ぼけたトランクも相変わらずの様相である。

俺よりも低い、もしかすれば里織ぐらいの背丈の彼女は、見上げながら感情のこもらない声で言った。

「おれはいいわ。単なる気分であげたただだから」

身も蓋もない言い方だったが、それだけで俺はこの人が面白い人だと直感する。ますます、このまま別れるのが惜しいと思えた。だから、歩く速さを彼女のペースに合わせる。

「そんなことより君。まだ煙草の臭いがするけど、控えた方がいいと思うわ。……………どうしてもやめられないなら、せめて煙草の始末はしっかりね」

不意に彼女は俺に顔を近づけたかと思うと、そんなことを言い始めた。とりあえず「はい」とだけ返事をしておく。そして彼女も、何事もなかったかのように前を向いた。しかし、俺はポケットから煙草を取り出して、パッケージを見せながら言葉を続ける。

「俺が吸ってるの、セブンスターって言うんですけど。煙草吸う人ですか？ 臭いには気を遣っているつもりなんですけどね。そんなに臭います？」

だけど、そんな俺の杞憂を、あっさりと否定した。

「いいえ、私の嗅覚が敏感なだけよ。それとイクニって呼んでくれ

ていいわ」

ついでのように自己紹介をしたイクニさんの表情は薄い笑顔だった。しかし、すぐに引つ込めた。

「俺は夏目です。よろしく」

「私はジタンを嗜んでいるわ。君はこのブランドを知ってるかしら？」

俺の挨拶ではなく、さっきの会話の反応だった。

「全く聞いたことがないですね。うまいんですか？」

「私は好きよ。でも、独特な味わいだから君が好きになれるかはわからないわ」

淡々としているけれど、もったいぶった言い方に聞こえて、俺は興味が湧いてきた。

「一本もらっていいですか？」

「どうぞ」

臆面ない俺の要望に、イクニさんは躊躇なく箱を差し出して煙草のお尻を向けてきた。俺はありがたくつまんで抜き出し、くわえてイクニさんからもらったライターで火をつけた。そしてそのライターをイクニさんに差し出した。

イクニさんはそれを一瞥して、視線を俺に移した。

「君にあげるわ」

「イクニさんは大丈夫なのですか？」

「あるわ。だから気にしなくていいわよ。ところで、君にとってはどんな味かな？」

その質問にしばらく俺は顔をしかめた。舌の上でころがしながら、ぽつりと言った。

「……………俺にはまだ難しいクセのある味ですね。俺はセブンスターのほうが好きです」

「そう。…………君は面白い子ね」

唐突で、しかし俺は興奮した。もちろん内心で、である。イクニさんは淡々と続ける。

「さて、これだけ話してみたものの、私は君の目的がわからないわ。君は私にどんな用があるのかしら」

「お礼が言いたかったんですよ。だから、イク二さんと話ができて良かったです」

笑って答えると、イク二さんは目を細めた。呆れてるようにも見えた。

「それは及第点とはいかなくても、願望にそぐって嬉しかったという意味かしら？ ナンパだったんでしょ？」

躊躇なくはつきり言う彼女に、苦笑しながらも俺は弁解した。

「俺はそんな軽い奴じゃないんですよ。本当に単純に話してみたかっただけです」

「そうね。ほんの冗談よ」

あっさりと覆されて、俺はますます苦笑した。俺は別の話題を口にすることにした。

「その髪の色は自前ですか？」

「ええ、そうよ」

唐突さには気にも留めず、白に近いブロンドを後ろに払った。その髪が梳くように流れる様が色っぽくて、俺はどきりとする。そして、イク二さんに不快感を与えない程度にまじまじと彼女を見つめた。

「綺麗な色ですね。やっぱりコツがあるんですよ？」

「……気になる？」

当然である。しかしそれよりも、かすかに悪戯っぽい笑顔に見惚れてしまった。初めて見る笑顔だ。

「それはやっぱり気になりますから」

やっと答えると、イク二さんはさっきの笑顔のままどことなく悟ったような、口角がわずかにつり上がったような気がした。そしてきっぱりと言った。

「美容師の勉強をすればおのずとわかるわよ」

「いや、美容師を目指そうなんて考えてませんから。興味はありま

すけど。俺ってすごいヘアスタイルに興味があるから、これ結構真面目なお願いなんですけど」

拝み倒しを試みた。引き際を間違えなければ、今までのように上手くいくと、高を括っていたが、その予想はまんまと裏切られてしまった。

イクニさんは唇を「それは君が努力すべき事柄よ」と、動かし

た。俺もその言葉で、あっさりと諦めた。表面上は。と、そこで気づいた。

「なんだかその口ぶりだと、まるでイクニさんが美容師を志していたように聞こえますね。もしかして、してました？」

彼女の答えはノーだった。

「昔、美容院で働いていた友人が聞いてもないことをたくさん喋っていたせいよ。その時は気にも留めていなかったけれど、ある日、いざ挑戦してみようとすると、その時言っていたことが役に立っただけ。頑張ってるね。私、頑張ってる男の子、好きよ」

「これから俺、頑張るんで、その頑張りを報告するのにメルアド交換しませんか？」

「断るわ」

「ごめんください」

特に収穫もなく帰宅してすぐに、一階から間違えようのない美帆のソプラノボイスが二階にいる俺の耳に届いてきた。顔を出すと母親と美帆が玄関で談笑していた。この色々と気むずかしい母親は美帆と結構ウマが合うらしく、大抵はこうして玄関で引き留める。これで美帆が迷惑に思っていないから、面倒くさい。

「俺に何か用か？ 部屋に上がれよ」

「何言ってるの。ここでいいじゃない」

「俺に用だからいいだろ」

文句を言う母親をさとして、俺の部屋に美帆を連れて行った。

入ってすぐ、慣れた手際でマフラーとミリタリージャケットを脱いで、部屋の隅のポールみたいなハンガー掛けに掛けた。マフラーは一回巻いている。

そして、美帆が白のタートルネックセーターとシヨールパン姿になると、これまた隅から引つ張ってきたクッションにお尻をつけて、両足を広げていつもの楽な姿勢をとった。俺もベツトに腰を落着けた。

「久しぶりだな。お前が尋ねてくるの」

「はい。相変わらず、男の人は部屋に入れないんですか？ これ忘れ物です」

差し出された、鍵を数本通したリングに、俺は目を丸くした。

「……お前の部屋に忘れてた？ 悪いな。気がつかなかった」

「そんなところだと思ってました」

受け取ると、鍵は机に置いてまたベツトに座る。美帆はにこにこと笑っている。それにしても、美帆を見下ろすなんて新鮮な感じだ。そんな感慨にふけつつも、煙草を一本取り出して火を灯す。美帆は一本ぐらいなら臭いは気にしないらしい。煙をふかしながら尋ねてみた。

「楽しそうだな」

「楽しくて仕方ありませんね。せんぱいがいると退屈が少なくてすむから大好きですよ」

俺はこの場合、けなされたよりも褒められたと思うことにしてる。だから俺も笑った。

「そう言ってくれると俺もテンションあがるな」

「実を言うと、せんぱいの家に入る口実だったんです。ほら、ここのところ二人つきりになる機会、ありませんでしたから」

「それならそうと誘ってくればよかったのに」

真つ当なことを言うと、美帆が口を尖らせた。

「……ほんと都合のいいことばっかり言いますね、せんぱいは」

文句を言ってるが俺は半分も聞いてない。座つてるときぐらいにしかできない美帆の上目遣いに、ドキドキしてる。今、口を滑らせば舌戦になつて居たたまれない結果になるのは明白だから、余計なことは言わない。怒つたときの美帆は無茶なこと言ったり、したりするからなあ。

別れて友人になつてから、それに磨きがかかった気がする。絶対里織の影響だと思う。

「冗談に決まつてるだろ。わかれよ」

「偉そうですね……………」

「そんなつもりはないけどな」

「自覚がない方が厄介ですよー」

あきれ顔の美帆は、馬鹿にするように間伸びた調子で言った。俺は苦笑する。

「そう簡単に怒るなよ。案外お前つて短気なのか？」

「せんぱいと付き合っていたら、ストレスなんてたくさん溜まりますよ。もう少しせんぱいに自覚があれば、私もさとり先輩も気苦労が減るんですけど……………」

これ見よがしに目をそらして溜息をこぼす美帆に、ますます俺は顔を苦くした。

「うるさいな。それで他に何か用があるんだろ？」

埒が明かない気がして、制し促すと、誤魔化されたことに腹を立てたような目をした美帆が、一度目を閉じて立ち上がった。瞬間、出し抜けに抱きついてきた。さすれば、俺も美帆の背中に腕を回す。すると、俺を見下ろす美帆はこぼれるような笑顔を浮かべ、その頬はうすく上気して、ちろりと舌を出した。

「せんぱい。この腕はなんですか？」

「そこは聞かないのがマナーだろ？」

「まあ、いいです。存分に甘えましょう」

「それが本当の目的か」

「だめですか？」

「いいに決まってるだろ」

事後の私服がうまいというのは、少々下品だろうか。と、ベッドの横に腰掛けて俺は思う。

「ところで、せんぱい」

「ん？」

背中越しに顔を向けると、毛布にくるまった美帆が枕に頬をうずめたまま笑っていた。

「このことがさとり先輩に知られたときの上手い言い訳考えてます？」

「もちろん考えてない。その時は、その時だ」

「さすが、せんぱい。清々しいですね。でも、男らしいかと言えばかなり微妙ですね」

すっかり口達者になった後輩である。一切、慰めになっていないところが味噌だ。

「大晦日にさとり先輩が帰省するから、みんなで初詣に行こうって話になってるんです。せんぱいも参加しませんか？」

「いいよ。どうせそれ、賢志の提案だろ」

「大正解です」

おかしそうに美帆は笑った。

人に興味がなさそうな風体のくせに、決まって行事ことには活動的な古馴染みである。幼馴染みと表現しないところが、あいつとの関係を如実に表すところだ。

「さすが幼馴染みですねー」

「せめて、古馴染みか腐れ縁って言うてくれ」

俺はげんなり気味だ。

そつえば前回の失敗を踏まえてなかったと気づいたのは、コン

ビニに来てしばらくしてからだった。しかしそれは杞憂で終わった。なぜなら、コンビニのショーウィンドウ越しに小さく手を振る美帆がいたからだ。そして何故か美帆は私服姿である。俺はコンビニの雑誌コーナーに足を運んだ。

「二番乗りですね」

「他はまだなんだな。というか、お前はなんで振り袖じゃないんだ？ 去年は着てたのに」

すると、美帆は言いにくそうに笑った。

「きつくてやめました」

「スタイルいいもんなあ。今年も見たかった」

「じゃあ、せんぱいが袴を穿いてきてくれれば着てきます」

「それはそれで結構面白そうだな。考えておく」

そんなくだらない話で盛り上がっている内に、コンビニ手前の薄明るい駐車場に停まった車から、賢志たちがぞろぞろと下りてきた。それを見て、俺たちもコンビニを出て合流する。

一昨年ぶりの里織の格好は、いつも通り振り袖だった。今年は青く、髪は結い上げて簪を差している。そして福本は派手ではないけれど存在感のある朱の振り袖、神楽は白が目立つ振り袖だった。二人の髪はそのままだ。

俺が三人の振り袖と美帆の私服を比較して混ぜ返すと、さすがに美帆と里織に怒られた。

「賢志は自転車で来いよ。俺は自転車を漕いできたんだぞ？」

「いつも楽ばかりしてるんだから、たまには苦労しろ。そうでないと経験が偏るだろ。美帆も自転車か？」

「違いますよ。私は親の車で来ました。いくら初詣でもこの時間は危ないので」

「そうか。さて、少し早いけど、もう行くか」

その賢志の言葉を機に俺たちは神社へ足を運んだ。これから向かうところは福本と神楽は初めてだが、それ以外のメンバーは高校進学以前の話になるが毎年参拝に来てた神社である。後、その町は里

織の地元である。

昔、里織が話していたことだが、その神社は町から結構離れた島の大社の分社であるらしく、その大社自体はそこそこ大きなものだと言う。そして、里織の家はその大社と深い関わりがあるらしい。

また、秋が深まった頃になると、町内と隣町の子供たちがこぞつて、舞子などに扮装して参加する祭りが催される。これには、俺たちも遊びに来ていた。里織は中学の間だけ、豪華な巫女服のようなものを着て稚児の舞を披露していて、短い間だけだった俺たちにとっては祭りがさらに楽しくなる見物だった。

人気がなかった暗い路地も、鳥居をくぐると一転して結構な長さの人の流れが目飛び込んできた。両側の壁には等間隔に提灯が吊り下がっている。揉まれるほどの数ではないけれど、女性陣の足下が普段のものと違うから、足場が悪いのと相まっていつもと比べて進めない。が、気にするほどではない。高揚としていたせいもある。

しばらく歩けば年代を感じさせる、石を切り取ったようなぼろの階段があり、あがればむき出しの土と仰いでも先が見えない巨木がいくつもある境内。神殿があるさらに上の境内にあがるための階段に向かう途中に、テントと餅を手渡すおばさん、臼に転がった餅を杵で打っていく暑苦しいおっさんに境内を広く照らす灯りがあった。ちなみにその灯りは、いくつかの木材を足になるように組んで中央を紐で縛り、頭にはぱちぱちと炭を砕いていく火を載せた古めかしいものだ。

賽銭箱の前には結構な人ばかりがあつたが、市内の参拝スポットである城と比べれば圧倒的に少ないから、すぐに順番が回ってきて柏手が打てた。次に俺たちは神社の裏手に回り、そこにもある、今度は胸に抱えられそうな大きさの賽銭箱に小銭を入れて、また柏手を打つ。

下の境内に下りると、何を思ったのか賢志とその連れ二人が餅つきするおっさんたちに交じってはしゃぎ始めた。

残された俺たちは仕方なく人混みから離れたところから、遠巻き

に賢志たちを見物するが、それもすぐに飽きて手持ちぶさただった。それに里織の存在があつて居心地が悪い。すると、美帆が壁から腰を浮かした。

「そうだ。私、何かあつたかい飲み物買ってきますね。せんぱいちは何がいいですか？」

「ブラック」

「ブラック、と。さとり先輩は」

「私も」

「ブラック二つですね。了解です。じゃあ、ぱぱつと買ってきますね」

いちいち復唱して確認を取ると、美帆は快活な返事を残して駆けて行った。使い古した表現であるけれど、まるで子犬である。それもあり従順な。俺は流し目にその背中を眺めて、ぽつりとこぼす。……たいがい正直者だな」

大切なことになると、美帆は肩がこわばるから簡単に透けて見えるのだ。

手慰みに持っていた火を灯してない煙草をくわえて、上下に揺らした。煙草を吸っていないと、すごく口が寂しい。そうしていると、声を掛けられた。

「気を遣わなくてもいいのにね。だけど、せつかく気を遣ってもらえたんだから、有効に使わないといけないと思わない？」

「面倒じゃね」

やる気なく返すと睨まれた。小柄なくせに鋭い眼力だ。顔が怖い。怖い顔をするなよ」

「真面目に話す気できた？」

「はいはい。聞くからどうぞ」

覇気のない仕草に里織はますます目をつり上げるが、それ以上は追求してこなかった。これ以上は不毛だということは理解してるのだろつ。そうしてくれないと俺も困る。

「怠け癖は変わらないのね。私が恭一くんの何に怒っているかわか

「つてる？」

「全然」

「……………美帆ちゃんのことよ」

「今にも溜息をこぼしそうな勢いの顔つきで、絞り出すように声を出した。俺は眉をひそめる。

「俺、何かしたか？」

「別れたくせにヤツてるなんて、恭一くんはどれだけ飢えているんだか」

「さらつと言っな」

「さらりとぶつちやけるから俺は吹き出して苦笑いだ。

「お盛んなことは結構だけど、別れた相手にそれを求められる神経が理解できないわ。まあ、美帆ちゃんからも迫っているから、これはお互い様。だけど」

「里織はためを作った。

「それは、恭一くんが美帆ちゃんにはつきりした態度を示さないから。だから美帆ちゃんは今中途半端な行動に取らざる得ないんだ。きっぱり言えはいいのに、どうしてずるすると美帆ちゃんと昔の関係を引っ張ってる？　いつまでそうしているつもり？　美帆ちゃんは待っているんだ。あんたの言葉を」

俺に口を挟む暇を与えず里織は言い切った。言い切って、堅く口を閉じて俺を睨みあげる。顔が怖い。刺さる。いや、今にも髪に挿した簪を抜き取って、俺の首筋に当ててきそうな勢いだ。あながち冗談でないのが、一層恐怖を増す。

「しっかり別れは口にしたんだけど。あいつがお前にそう言っていたのか？」

「案の定、里織は首を横に振った。

「違う。けれど、私はいらいらするの。煮え切らないあんたが。もう一度、はつきりさせてきなさい」

「お前に強要する権利あるのかよ。お前の気分だろ、それ」

「……………そうね。でも、後悔する前になんとかしんなさいよ」

里織は激情を引つ込めると、そのまま視線を遠くにやって立ちつくした。

俺はこっさり溜息をこぼす。二年ものの喧嘩の原因があっさりとわかった上、果てしなくだらなかつたからだ。

まだ美帆は帰ってこず、賢志たちも終える気配を見せない。今では無表情の里織を盗み見て、俺も遠くに目をやった。煙草に火を灯して、ふかす。薄い煙は立ち上ってもすぐに空にかき消される。澄んだ空気の前には、煙は圧倒的に弱く入り込む余地がない。そして澄んだ空気は俺の体を刻一刻と冷やしていく。そろそろ本当に体が震えそうだ。

思い出したように里織が俺を見て言った。

「美帆ちゃん、毎日昼休みになると教室を訪ねてきてるよね？」

「ああ、そうだけど」

「健気ね」

それだけ言うと、再び里織は遠くを見た。何の嫌がらせだろう。

そういえば、里織に美帆を紹介したのは俺だったか。合コンで知り合って付き合うまでの間だったと思う。仲は最初から良かった。

もうしばらくしてから美帆はやっと帰ってきた。俺と里織を伺うように見たのは、やはりそういうつもりだったのだろう。胸に抱えていた缶コーヒートを渡して、俺と里織の間に地面から腰を浮かして壁にもたれかかって座った。

全く可愛い後輩である。

俺はもちろん、恐らく里織も苦笑した。

俺たちが缶コーヒートを啜って体を温めていると、賢志たちが餅の入ったパックを持って戻ってきた。賢志が俺の手元を見て言う。

「お前も餅をつけばよかったな。温まるぞ」

「だるい」

切って捨てて、携帯灰皿に煙草を押しつけた。

福本がくすくすと笑って賢志を労う。

「たくさん指導されたよね。けんじくんは頑張ったよ。握り方に付

き方に、細かいところまで、付きつきりで教えられて。ちよつと間違えただけです。こい勢いで怒られてたんだよ？ 見てた？」

「あきた」

「私も」

「私は途中で飲み物買いに行っていました」

「ははは……。がんば」

ただ一人、美帆だけがすまなさそうに言った。哀れな奴である。賢志の報われなさは相変わらずなようだ。どことなく、賢志は残念そうだった。苦笑する福本は腕を叩いてあげている。

不意に神楽が俺にパックを手渡してきた。俺は礼を言って受け取ると、神楽は仏頂面のまま、すたすたと福本の隣に戻っていった。

美帆はご満悦で、里織は無表情のままだった。

「で、どうする？」

「こんな時間に店が開いているわけがないからな。これで解散だろ」
賢志の言葉に、他の面子も口々に「そうだね」と言ったから、解散となった。といっても、これからまたコンビ二にまで行って車の奴はそこで待たないといけない。とりあえず、俺たちはコンビ二へと向かった。そして境内を下りていく。そんなときだった。俺は振り返って、近くにいた美帆の肩を叩いて一気に言った。

「悪い。先に帰っていてくれ。他の奴にも伝えてくれ」

「え？ はい？」

きょとんとする美帆を置いて、俺は境内の方へ駆け出した。

走っていく内に、いつの間にか神殿の裏手に来ていた。この時間帯になると、参拝客の姿は全くない。せいぜい表でたむろっているぐらいだろう。

さすがに俺の前に立つ人は俺に気づいたらしく早々に振り返った。その顔は呆れている。

「そのしつこさも、ここまで来るとすごいと思うわ」

イクニさんは近くの墓石のようなものに腰掛けた。里織から顰蹙

を買いそうだ。

「今日はどうしたの？　ライター？　懲りずにアドレス？　もしかして煙草かしら？」

「どれも違いますよ。そんなことばかり考えているわけではないんですけどね」

イクニさんの俺に対する印象に思わず苦笑をこぼした。釣られるようにイクニさんも薄く笑った。ささやかだが、感情を前面に出してくれるようになっていく。でも、まあ多分、あの澄ましたような顔がイクニさんのスタイルなんだろうけど。

「そうなの？　ごめんね。てつきり、そんな子だとばかり思ってたわ」

「ちよつとひどい言われようですね」

「それで、どうしたの？」
「話をしに來ただけですよ。ナンパ目的ばかりで話しかける訳じゃないですよ」

冗談交じりに口になると、イクニさんは目を丸くした。

「あら、ならちようどいいわね。私も話し相手が欲しかったのよ」

イクニさんの表情が柔らぐ。俺にとっても都合が良かった。彼女が腰掛けている墓石に程近い塀にもたれて、イクニさんに続いて煙草をくわえて火を灯した。

空を仰げば市街とは比べほどにならないほどの煌めく星空がある。それに負けじと、煙草の先に二つの濁ったオレンジの光が細々と輝いている。

「もしかして、イクニさんは市内を歩き回ってます？　これで三回目ですけど、結構会いますね」

「当たり前」

冗談だったのだけれど、イクニさんはどことなく悪戯っぽい笑顔を浮かべたのだから驚いた。思わず俺は彼女をまじまじと見てしまふ。

「意外と足腰強いんですね。何かスポーツしてました？」

「そうね。これでも剣道をしていたのよ。後、薙刀も少々。小学校に上がる前から練習していたから、かなりの腕前」

握って開くを繰り返す彼女の小さな手からは想像もつかなかった顔に出ていたのか、イクニさんはからかうように目を細めている。

「あら、信用ない？ 実は合気道もしてたの。ちよっと組み手でもする？」

意外と彼女は好戦的だった。俺は笑って流す。

「できることなら荒事は勘弁です。というか武道系を嗜んでいたんですね。道理でこんな夜中に一人で出歩いているわけだ。ところで今日も散歩ですか？ 涼みに来たとか」

「それも当たり。良い勘してるのね、君」

機嫌を良くしたからか、今日の彼女はよく喋る。美帆とはまた違う、気品があつて老獪なソプラノがまるで好きなアーティストの歌を聴いているようで、俺を高揚とさせる。

「孤独を内包する景色はとても美しいと思うの。たとえば、ここみたいなひっそりとした場所。澄んだ空気が私の中まで浄化するような錯覚を覚えるわ」

「喧騒が嫌いなんですか？」

「いいえ」

当たりをつけてみるが、あっさりと否定されてしまった。しかし今の彼女は思わず見惚れてしまうほどに魅力的だった。まるで夢を見る少女のような、それでいて思わぬ快樂に戸惑いっつも溺れていく女のような、繊細なものだ。

「誰もいない港に立って、波飛沫に耳を澄ますのもまた、乙なものよ」

つまるところ彼女の感性に人は邪魔ということになる。しかし、

ここは余計なことを言わない方が華だと直感した。

「君はどう？ 景色は嫌いかしら？」

「好きですよ。人間観察も同じくらい好きですね」

「それはまた、素敵なスキルね。接客に向いてると思うわ。人付き

合い上手でしょう、君」

「よく言われます。……イクニさんって、なんというか、すごい冷静で客観的に物事を見てるような雰囲気がありますよね」

「そうね。私と面識を持った人は、君と似たようなことを言うわ」

「それにあか抜けた感じもあります。都会の出身だったりしませんか？」

そこでイクニさんは瞬いた。真顔のまま首を傾げて、俺をじっと見つめてきた。

「どうして？」

「だからあか抜けてるように見えたからです」

「単純ね」

冷やかな口調だった。

「近からず遠からずといった感じよ。もしかして君、都会に興味があるのかしら」

「そりやありますよ。今時の若者なんですから」

「確かに見た目通りの若者よね、君は」

イクニさんはうつすらと微笑む。

「すると、やっぱり将来は都会で就職になるのかしら？」

「そうしたいです。そのためなら努力は惜しまないつもりでいます。まずはどんな仕事をするかを考えないといけないんですが」

意気込んだのはいいけれど、もっとも大切な部分が抜けてるから、とたんに恥ずかしくなつて口を歪めた。

しかしイクニさんは容赦なく突いてきた。口調はやっぱり冷やかである。

「まだ考えていない訳ね。そこが君らしいと言えるわけだけれど」
見透かしたようなことを言う彼女が不思議と鬱陶しくなかったのは、何故なのか。全く見当もつかなかった。ただ、面白い人だなと思えた。

「有限の時間を、当然、無限にあると勘違いするのは若者の特権ね。果てを見てしまった子供は、もう子供ではなく大人。大人は安寧を

望む人間のこと。なら若者は変革を求める人間といえるわ」

不意にイクニさんがこぼした独白に俺は首を傾げる。何が言いたいかわからない。そもそも、今の彼女の目に俺が映っているかすら怪しい。

「この定義で言えば、君は若者らしいわ。やはり若者は変化を貪欲に求めるものでないと。君はどうして煙草を吸うのかしら？」

「どうして煙草を吸うかと聞かれても」

唐突の振りだ。そして彼女は淡々と付け加えた。

「理由のない行為なんてものは絶対ないわ。人が何かをするとき、そこには意識的にしても無意識的にしても、理由があるの。理由がないなんて例外があれば、今ある学問は破綻してしまうわ」

もっともらしい言い分だ。少なくともさっきよりはわかりやすかった。けれど、どれだけ言われようと結論めいたものが見えてこない。

「……………そんな力まないでいいわよ」

とたん、彼女が薄い笑みをこぼしたものだから、俺はかなり訝しんだ。

「ほんの軽口よ。深く考えなくても、気にしなくてもいいわ」

「つまり、冗談ですか？」

「それだと少し言い方が悪く感じられるけど、概ねそうよ。ごめんね」

とても謝っているとは思えないほど、口調は淡々としていた。顔は笑っているから落差が激しい。

「でも、君が都会に行きたいという気持ちは、今の現状に不満があるからではないかしら？」

本当に見透かしたようなことを言う人だ。

「……………愚痴を聞いてもらえますか？」

「いいわよ。私は話し相手が欲しかったのだから、むしろ願ってもないことだわ。存分に語りなさい」

げんなりとする俺とは対照的に、彼女は今までになく明るい調子

だった。余計に彼女のことがわからなくなった。でも、ここで取り下げるのも勿体なく感じがして、俺は素直にとうとうと語り始めた。「卒業証書欲しさで高校に進学したのですけど、高校だからこそその楽しみも期待していたんです。見事に裏切られました。担任はつきりとしらない上に何もわかってない人で、同級生は自分の価値観にそぐわなかったり、自分以外がでしゃばったりすると、一生懸命潰そうと躍起になるような奴でした。これなら、早々と専門学校に行けば良かったと思うぐらい、時間の無駄使いだなあって思うんです。面白くないですよね」

「理不尽な環境ね。君が周囲と上手く折り合いをつけられるタイプだから、冷静さが余計に君の神経を擦り切らせているのじゃないかな。容易にはいかないわ。でも、華やかな高校生活を送ってる、送ってきた人なんて、ごく希だと思っわよ？ 諦めたら？」

まさしく正論で思わず苦笑がこぼれる。

「現実的ですね……。俺が聞きたかったのは正論ではないんですけどね。これだから田舎は嫌いなんです。選択肢が狭いから」

「都会だって、特段選択肢が広いわけではないんだけどね……。それは自ずとわかるでしょう。ただこれだけは指摘しておくかね。環境で選択肢が決められることもあるわ。けれど、世の中それに抗う人がいる、君のように。そんな人は、諦めるか、もしくは自ら選択肢を狭めるか、己の願いを叶えるかに分けられるわ。私には君がこれからどうなるか知りようもないけれど、君は君の意志を大切にしたいわ。だって君、面白い子なんだもの」

褒め言葉だと思ふことにした。

「……………そういえば、イクニさんはこの町に住んでいるんですか？」

彼女の足下の古めかしいトランクを見る限り、多分違っだろうけれど一応聞いてみる。

随分と短くなった煙草を口元から離して、イクニさんは俺を横目に見た。

「この町には旅行に来たの。この辺りの景色を見て回っているんだけど。やはり土地勘がないときついわね」

「じゃあ俺が案内しましょうか？ 詳しいですよ」

実を言うとそこまで詳しくない。わざわざ不利になるようなことを言うこともないだろう。

「お願いするわ」

彼女は目を細めて、齒を覗かせた。

第二話

第二話

「そついえばせんぱいって神楽さんと付き合っているんですか？」

「……言いふらしたの誰だよ」

「福本さんです。さとり先輩は、節操なしって言っていました」

ちよつとした気分で美帆をファミレスに誘ったのに、その一言で機嫌が悪くなった。まさか昨日の今日で話が広がっているとは思わなかった。

後、別にデートの誘いをしたわけでもないのに、今日の美帆はキョロツト風のサスペンダースカートとタイを提げたワイシャツの装いだ。隣に置んだコートを置いてある。

そんな美帆は両手で頬杖をついて無邪気に笑っている。

「福本さんって意外とおしゃべりだよな。品がないのか？」

「神楽さんが心配だからじゃないですか？」

できれば溜息をつく俺のフォローをしてくれ。恨めしげに美帆を睨む。

「でも、びっくりしました。意外ですね。手が早いのは知ってましたけど、昨日の初詣の時に告白されたんですか？ 神楽さんが一人で待ってたはずですよね？」

俺から告白したと考えないあたり、こいつの俺に対する印象がよくわかる。

美帆が笑顔で俺をじつと見つめてくる。

「まあ待て。話してやるから時間をくれ」

「はい」

にこにこされる手前、俺は内心で溜息をこぼした。

イク二さんと別れた後、俺は自転車を置いてあるコンビニに戻ってきた。

何故か神楽がいた。仏頂面とおまけ付き。俺は眉を寄せる。

「お前だけ？　もしかして待ってくれてた？」

「くたびれた」

「悪いな。うれしいんだけど、ほんとどうして？」

察しは良い方なのだが、こればかりは唐突すぎてよくわからない。対応にも困る。

「何？　文句ある」

「ないに決まってるだろ」

当然だ。この状況で迷惑と感じる奴は人嫌いぐらいだろう。しかし、せめて説明を求めるとわかって欲しかった。ふて腐れてる神楽を見て、それは望みすぎだなと諦めたが。恐らく、人付き合いが苦手な奴なのだろう。

改めて神楽を見てみる。背は俺と変わらない。ちよつとだけ神楽の方が低いぐらいだ。美帆が長身なだけで、神楽も女にしては背が高い部類に入るだろう。

「わざわざ待ってくれてうれしいよ。足がないんだったら一緒に帰るか？　家まで送ってやるよ。女の一人歩きなんて危ないから」

「……………夏目くんって、私のこと嫌い？」

どうして俺の気遣いをふいにするような発言をするのだろう。もし俺が嫌いと言えはどうするつもりだ。一人で帰るのか。それはそれで寝覚めが悪い。

「嫌いなら送るなんて言わないからな。まだ付き合いは短いけれど、お前のこと嫌いじゃない」

「やっぱり嫌ってるよね。面倒くさいって思ってるよね。私、迷惑

でもかけた」

なんでこいつは喧嘩腰なんだ。しかし俺は平然と真顔で首を傾げる。

「どうして、そんなマイナス方面に考えるんだよ」

お嬢様な雰囲気醸し出してゐるくせに、言ってることはかなり暗い。口調は勝ち気なのに。

「してないしてない。疲れてるだけ。それでどうした？ 用があるんだろ？」

やれやれと言った具合に溜息をこぼす。

神楽は口をつぐんで不機嫌そうに目を据えたかと思うと、すぐに狼狽えたようにくちをもごもごさせ始めた。それをしばらく繰り返し、意を決したように俺を見据えた。そしてほとんど叫ぶように言った。

「あ、遊びに行かない？ 春音と武田と一緒にM市に！」

「いいけど」

なんていうか他力本願な提案だなと思ったけれど、断る理由もなかった。それに空回り気味だが、かなり頑張ってる感が漂わす神楽が少し不憫だった。

イクニさんの部分は端折って説明し終わると、美帆はきょとんと首を傾げた。

「それって告白ですか？」

「俺がいつ付き合ってるって言ったよ。あいつら何を勘違いしてるんだか」

俺はあしらうように言った。

「まあ、告白されれば付き合っけどな」

「軽いですねー。そんなことを言っていると、今まで付き合ってきた女の子に呪われちゃいますよ」

呆れたようにもからかうようにも聞こえる美帆の声色に、俺は目を細めた。

「そんなことを言うなよ。付き合ってる間はちゃんと相手のことを想っているんだから、別れた後まで引つ張られるなんて迷惑」

「勝手ですねー。そもそも別れる原因の大部分がせんぱいなんじゃ……。興味をなくすとたんに付き合いがおざなりになるせんぱいのセリフではないと思いますよ?」

半眼で睨み付けられながら、今更この話が美帆にとっての地雷だと思い出した。

「自分優先もそろそろ控えた方がいいと思いますけど。女子受けが良いからって調子に乗ってると、いつか痛い目に遭いますよ。せんぱいの付き合い方って、気を遣うように見せて、その実自分の思い通りに人を動かして、けど面倒になれば相手と別れたり、別れ話を切り出されたりって感じじゃないですか」

「そこまでわかっていて俺と話してるお前はなかなかすごい奴だと思っぞ」

「……………真面目に聞いてます? 誤魔化そうとしてませんか?」

のし掛かるように顔を寄せてくる美帆に俺は笑う。すると、美帆はじろりと睨み付けてきたが、そこでウエイトレスがコーヒーを運んできたから、行儀良い姿勢に戻ってそちらに愛想笑いを浮かべた。そしてウエイトレスはそれぞれの前にコーヒーをことりと置いてそそくさとその場を後にした。妙に腰が引けていたから逃げたのだろう。水を差されたような気がして、俺たちは沈黙のままコーヒーを啜って空気を誤魔化する。

美帆は縁から口を離すとテーブルにカップをことりと置き、ほつと吐息をついた。

「私、せんぱいのそんなところ嫌いです」

背が高いくせに上目遣いで、さらりとへこむようなことを言われた。しかし、美帆は目元を和らげて続けた。

「でも、決めたことは最後までやり通そうとするところは好きです。私がせんぱいを好きになったのはそんなところですし、今でもそうです」

そして笑みを深めて、

「そこが変わらない限り、せんぱいは尊敬のできるせんぱいですよ」

そのファミレスで美帆と会話した日の夜に、神楽からメールが届いた。

これが初めて見る文章なのに、おおよそ神楽らしくないなと思ったが、もしかしたら内弁慶みたいなものなのかもしれないと納得して読み進める。

「明日にデートねえ。急だな。イクニさんとのデートの前日か」

賢志たちのフォローに期待しようか。というか何故賢志と福本まで。ダブルデートってやつか？ そんなことを考えたがすぐに放り出して、明日着ていく服装を選んでからベットに潜り込んだ。

メールには、M市の商店街を回るという大筋と、細かいことがいくらか書かれていた。集合場所はお決まりの駅前である。

いつも通り早めに駅前に到着した。ここからM市まで普通電車にかかる時間、そしてそれによってデートに割ける時間が決定するという都合上、朝の時間帯だ。惰眠を貪ることが学生の務めというものなら、俺は補導対象だろう。そんなくならないことを、到着した賢志たちに話してみると、賢志が呆れ顔で言った。

「くだらないこと言う前に、他にあるだろ」

「冗談には冗談で返せよ、面白くないな。神楽ってセンスがいいんだな。髪型にも手を加えているなんて、俺が通ってる高校の女連中にも見せてやりたい」

「そ、そう」

おどおどと神楽が頬を赤くする。その反応もまた初々しい。

「お世辞を言えとは誰も言っていないけどな」

「水を差したらだめだよ」

そんなノリで俺たちはM市へと、一時間ほど電車に揺られながら到着した。

俺がこのM市のJ Rの駅に来たとき、たまに思うことがある。いつか誰かが指摘したことだ。俺が住んでいる市の中央の駅は、田舎の市にはそぐわないほど綺麗な建物である。それなのにM市の駅は、鉄道開通当時の写真に写っているような古ぼけた建物だ。仰々しい言い方をするなら古風だろう。この建物こそ田舎にあつてしかるべきものだ。県庁所在地の駅がこれでは旅行者は肩すかしを食らわされた気分になるだろう。

それはともかく、俺たちは古風な建物に似合わない改札口をくぐって、駅前のロータリーでバスに乗り込み今度は市駅まで向かった。市駅は全国規模の大型百貨店の一階と地下の中間の辺りにあるが、市駅を使うにしろ使わないにしろ、そこら周辺に用がある場合その百貨店の前のバス停で下りなければならない。当然俺たちはそのバス停で下りた。M市の大型商店街はこの百貨店の正面玄関の斜向かいに位置するからだ。ちなみに百貨店の隣はロータリーになっていて、その中央は路面電車の終点が設置されている。

ぞろぞろとバスを下りる人混みに揉まれながらも無事全員の顔を確認できた。

「やっぱり人が多いね」

「昨日ならともかく、今日から余程の店以外は開くからな。バーゲンセールの子もあつたろうが」

見るからにくたびれた神楽以外は明るい。というわけでもなく、実は俺は人混みが嫌いだ。酔うほどではないができることなら満員バスは勘弁したかつた。そして賢志は澄まし顔だから、明々と楽しそうなのは福本だけだ。これではとてもダブルデートの雰囲気ではない。無理矢理連れ出された友人とその実行者が適切だろう。

「早速商店街を回るのか？ その前に昼食をとらない？」

「昼食かあ。そうだねえ、どうしようか？」

「俺はへつてないが？」

「……私は、ちょっと休みたい。……疲れた」

小腹が気になって、それと神楽の様子を気に掛けて提案してみる

と、それぞれが思い思い口にした。福本はそれで神楽の様子に気づいたのかそれとも最初から気づいていたのか、多分俺からの提案を待っていたのだろう、俺たちになこりと笑いかけて、ぴっと指を立てた。

「じゃあ、どつか喫茶店にでも入ろうか」

「それがいいな」

雰囲気的にも正しい。ファーストフードでは味気ない。

そんなわけで俺たちは手頃そうな喫茶店でしばらくくつろぐことにした。

店は簡単に見つかった。

商店街を入つてすぐのところで、喫茶店としてはかなりオーソドックスな、店先に飾られた花壇と椅子に立て掛けられた小さな黒板、白い文字と絵が描かれた大きな窓とガラス戸が印象的な店だ。店員の制服は濃緑のワンピースとフリルエプロンと中世ヨーロッパの下町風であか抜けないが、自己主張しすぎるよりはいい。派手は好きだが、けばけばしいのは嫌いだし、それでは何より店の雰囲気合つてない。全体に合わせることは大切だ。

「絵本みたいな店ね。少女漫画に出てくる喫茶店ってこんな雰囲気なのかも」

テーブル席に腰を落ち着けた福本が賢志に囁いた。しかしながら、乙女なんて思考を一欠片も理解できない無骨なこいつは、何も考えずただ単純に言う。

「わからん」

「けんじくんの好みじゃないもんねー。よかった、期待通り」

むしろ福本的には一安心な反応らしい。まあ、わかるけど。

案の定、賢志は顔をしかめていた。

「なら聞くな」

「ファンシーを理解した賢志ねえ……。それこそ少女漫画ぐらいでしかお目にできないな」

「あ、上手」

福本が褒めてくる。賢志は無然となつてそっぽを向いてしまった。神楽は瞬いてしきりに俺と福本を交互に見ていたが、最後には仏頂面になつて俯いてしまった。

「拗ねるなよ、神楽。お前のコーディネートはまさにこの店の雰囲気なんだからさ」

誇張もあるが嘘は言つてない。

その一言で神楽は仏頂面を弛めて、おずおずと俺を見上げてきた。真正面を向かないのは照れてるんだろう。大きな瞳が水面のように揺れている。……この表現は大げさだな。

「……ほんと？」

「俺は嘘つかないんだけどなあ。どっかの誰かは照れ隠しで嘘をつくけどな」

「どこかの誰かは節操がなくていじられているがな、田沢に」

「何、実名だしてんだよ。元バスケ部のバスケ馬鹿」

「黙れ。また太ったんじゃないか、お前？」

「そろそろやめなよ。周りに迷惑だよ」

手が出る前に福本が仲裁に入つてどちらともなく腰を沈めた。隣を見ると、神楽がどこもなくおろおろしてるように見えた。要領の悪い奴。

全員が食べ終えた頃には神楽もすっかり元気になっていた。それを見計らつて俺たちは喫茶店を出る。アーケードがある商店街とはいえ、やはり肌寒い。暖房の効いた店内から外へ移ろえば余計だ。色合わせに買ったジャケットは結局は安物らしく、しのぎ具合も安かった。

「いつにも人が増して多いな。はぐれるなよ、春」
「うん」

差し出された手に腕ごと絡みつく福本は幸せいっぱいな表情を浮かべていた。さすがに賢志でもこのぐらいの気遣いはできるらしい。俺も神楽に顔を向けた。すると、神楽も俺を見ていて視線がぼつちり合つた。見続けていると神楽の頬が赤く染めつていき、涙目に

なっていく。そろそろ限界か。

「手を貸すから、握っていいよ」

「……………わかった」

今までの女と同じように、神楽の手もまた小さくて柔らかかった。いつもより華やかな商店街はほとんどぎれない人の流れを抱えて、アーケードといった壁にぶつかった声や靴音を跳ね返して、有名どころに劣りはするが、十分過ぎるほどの喧しさと賑わっている。また男はともかく、女も華やかな装いだ。時折ダウンの集団もあるが、それは見なかったことにする。

途中何度も立ち止まって福本らが店舗に飛び込んでいくが、お約束みたいなものだから賢志ほど露骨に表情に出さない。そもそもデートといえばこんなものだ。面白い服などがあったり、試着の出来を聞かれたら反応するだけの賢志と違って、神楽が似合いそうな服を選んで試着させたりしてるから、俺なりに楽しんでいる。着させられている神楽も満更ではなさそうだ。それでも自分が選んだ服がやっぱりとでも否定されれば目をつり上げているが。そのたびに更にさとさなければならぬから面倒くさい。神楽はかなり意地っ張りの性格らしい。

「……………夏目くんって才能あるよね」

「ん？ 何の？」

商店街を歩いていると不意に神楽がもらした言葉に俺は耳を傾けた。

「その人が似合うと思う服を選んで勧める才能。私、なんだか夏目くんに翻弄された気分。でも、楽しかった。私が選んだ服じゃないのに。夏目くんが選んでくれた服を着ると、なんだか温かくなった。服がすごくほかほかした」

周りの雰囲気感に感化されたのか、恥ずかしがり屋な神楽がまっすぐな言葉を口に出していることに驚いた。というか中身は以外と女の子らしい。いや、普段の服装を見れば、むしろ納得の中身である。

「そう言ってもらえると選んだ甲斐があるよ」

「明日も遊ばない？」

唐突な提案だった。もう少しさりげない演出はないのだろうか。こいつに求めても無駄だろうけど。もう少しムードというものを図ればいいのに。

「明日は……無理。予定があるんだ」

「だめ？」

今までが嘘のように神楽の顔色が驚くほど翳る。俺は内心眉をひそめた。嫌な予感がする。

「大切な用事があるんだ。今更なしなんて言って相手に迷惑を掛けるのも嫌だし」

一番は俺が話したいから。

俯いた神楽の目がやばい。瞳孔が開いているし、頬がひくついている。

「私との予定は？」

「悪い」

「私の予定は大事じゃない？」

しぶる神楽をなだめるが、堂々巡りに終わる。見た目とは裏腹に神楽は物わかりが悪かった。

「私に合わせてよ」

今にも泣き出しそうな怒り狂いそうな顔をして言われても困る。というかこんな小細工ができる女だったのかとびっくりだ。どこか小細工かというと、言っていることが駄々をこねている子供のそれだ。ただ見た目はれっきとした女だから、泣かれれば俺の体裁が悪い。それがわかってやってるなら、大した女である。なんとなく里織が「成長した」と言ってくるビジョンが浮かんだ。

「私に合わせてよ！」

「とりあえず落ち着けって」

これ以上癪癪を起こされては本気で俺の体裁が危ぶまれる。もし知り合いがいたら余計だ。しかし俺の言葉は焼け石に水。むしろ神経を逆撫でたようで、ますます神楽の目が赤くなって口調がとげと

げしいものへと変貌を遂げた。周囲の目が冷ややかだ。

「いいじゃない！ そんな約束やぶったって！ 私を優先してよ、私の相手をしてよ！ どうして？ 夏目くんだって楽しかったんでしよう？ だったら私をもっと楽しませてよ！ もっと私の予定を考えてよ！」

かなり勝手な言い分がしばらく続くと、

「あや！」

どこからともなく福本が駆け寄ってきた。抱きしめられた神楽は少しだけ落ち着いたらしく、それ以上がなり立てはしなかった。

「とりあえず逃げるぞ」

「……そうだな」

冷や冷やしてることを悟られないようにゆっくりと賢志に同意した。そして商店街を横切る路地を使って俺たちは外に出た。

ようやく落ち着いたらしい神楽を近くベンチに腰掛けさせて、俺たちは少し距離を置いて話し合った。

「意地っ張りってわかってたけど、ここまでひどいぞ、やる気なくす」

福本を気にしてできるだけ優しい口調を使ったが、本心としてはわがままとかいってやりたい。他には自己中か。すると福本は困ったような顔で俺をちらりと見てきた。そこで賢志が制するように口を開いた。

「それが原因で春以外とはうまく付き合えないんだよ。だから、あれを見て俺も春もお前を責めはしない」

「……うん。ごめんね、二人つきりにして。羽目外し過ぎちゃった」
うかつだったと力無く笑う福本を責める気が失せて、俺は慰めるように言った。だから肩を落とすぐらいは許して欲しい。

「楽しくなるのは当たり前だろ。福本に責任ないじゃん。お前らに悪いけど、全部あいつの責任。自分の意見が通らなかったからって、こっちの都合を考えないのはだめだろ」

「うん。それをそれとなく治してもらおうと頑張ってるんだけどね」

「一向に治らない」

「ごめんね。最近は直ってる傾向が強かったんだけど。だから告白を推したんだけどね。もちろん、あや自信がナツくんのこと好きなんだよ？ でも、まだ早かったみたい。昔はもつとすごかったの。」

わがままなこととしてみんなに責められても、自分は悪くないって意地を張って、窓から飛び降りようとしたぐらいなの。だから、昔に比べて、我を通すことはなくなったんだよ？ それにあやのあれは、あやだけのせいじゃないんだ。小学校からあやのことを知ってる子から聞いたんだけど。元々私の強かったあやを家族が腫れ物のように扱ったり、クラスメイトや教師が目立つからって理由で、何かあるとすぐにあやの責任をなすりつけていたからなの。だから、あやを責めないであげてくれる？」

言い辛そうにする福本の言葉を賢志が引き取ったのが契機になったらしく、肩の荷が下りたように福本は話してくれた。俺は福本の言葉に素直な気持ちですごいと思えた。だから、俺の口から言葉がぼろりとこぼれた。

「すごいよ、お前。あんなった理由があるからって、付き合いおうなんて普通思えないと思う。俺なら嫌になる。福本ってあいつと付き合い長いのか？」

「こいつお節介だから、中学時代から神楽と友達やってるらしいんだ。ばかだろ？」

「ばかは余計だよ」

「私ならあの子の性格を直せるなんて言う奴は、ばかと言われて当然だろ」

弱々しく噛みつく福本を見て賢志は笑う。これだから賢志がバカで考えなしで無神経な人間なのかわからなくなる。後、見せつけてくるな。と、思っていると、賢志が俺を見てきた。珍しく賢志が苦笑を浮かべていた。

「こいつ、普段はお気楽で反省なんてしないくせにな。あいつの時だけ身を削るようなことをするんだぜ。だから、癪癪持ちで、その

くせ行動力がなくて依存心の強いあいつと長く付き合えるんだがな」
「ああ、はいはい。納得した。だからダブルデートなんだな」

話が長くなりそうなので早々にけりをつけておく。いい加減疲れ
てきた。

「そうだ」

「うん」

それぞれが頷くのを見て俺は頭を掻く。疲れた上に、面倒なこと
に巻き込まれたと直感した。まあ、直感も何もあからさまだけど。

「とりあえず明日は無理なんだと、あいつを納得させてくれないか
？ 俺には無理だ」

「任せておいて」

そこだけは福本は力強く頷いてくれた。だから、俺は好奇心をそ
のまま覗かせてしまったのだろう。

「もう少し聞かせてくれないか？」

「いいよ」

しかし、福本は不審がることなくそう言った。反応の違いは付き
合いの差だ。

「お前らが付き合うようになったのも、神楽絡みか？」

俺のその言葉に、福本は目を丸くしてすぐに顔を赤くした。珍し
く狼狽えたようにしきりに髪先をいじり始めている。俺が苦笑して
いると、唐突に足を蹴られた。見るとむっつりとしてる賢志がいた。
俺はにやけた。

「嫉妬するなつて。奪おうなんて考えてねえよ」

「当たり前だ。つつくなつて言ってるんだ」

「お前だつて恥ずかしいもんな。馴れ初めなんてものは」

「……………お前の恋愛の失敗談を語るぞ？」

「言った瞬間、俺はお前を殴る」

再び俺と賢志の間に険悪な空気が生まれた。しかし福本の溜息で
それもすぐにかき消えた。

「……………せつかく人が余韻に浸ってたのに。喧嘩はやめてよ。また人

目を集めるつもり？」

それは勘弁だ。

同じ気持ちなのか、賢志も俺と同じく苦い顔をしていた。

駅前でイクニさんと顔を合わせた俺は、駅から結構離れた公園へと案内した。荷台に彼女を乗せてだ。俺も高校進学後は足を運んでいなかったが、久しぶりの海からそれほど離れていない上に敷地もかなり広い公園はあまり変わっていなかった。実はここよりも広い公園は他にもあるのだが、駅を中心としてことは逆の場所だ。だから、ここが一番無難だった。

「静かでいい場所じゃないですか？」

芝生の上に立ちつくして公園を眺め、空を仰ぐイクニさんに俺は笑いかけた。すると、俺に顔を向けたイクニさんの表情には、穏やかな笑みが浮かんでいた。

「気に入ったわ。もうしばらくこの町に滞在したくなるくらいに」
彼女の普段が気になったが、結局は聞かなかった。多分答えないだろうし、答えたとしてもはぐらかすような答えだろうし、それに詮索を嫌うタイプに見えたからだ。

「都会だと、公園だけでここまで土地は使わないのよ。無駄遣いだからという理由で。それにしても空気が澄んでいていいわね」

「田舎の取り柄じゃないですか？ この町は自然がほとんど残ってませんけどね。水も濁ってるし。同じ県内でもS市の方が田舎らしいですよ」

「それはまた面白い話が聞けたわ。次はそこに行ってみようかしら。ところで全然人の姿が見受けられないけど、いつもこんな感じなの？ 住民の憩いの場所になりそうなものなの？」

「そこがまたこの町の不思議なところですよ。なんででしょうね？」
「海が当たり前すぎると興味が失せるのと同じことかしら」

苦々しく笑い飛ばすと、イクニさんは興味深げに分析を始めるか

ら、困ってしまう。

「お年寄りが多いというのも原因かもしれませんよ」

「子供も目に見えて減ってるものね」

それで納得して終わられても寂しいけれど引つ張られても困るから胸をなで下ろす。

人工的に設計され整然とされた公園を眺めていたイクニさんは、不意にすたすたと歩き始めた。もちろん俺もついて行く。

「立っている場所の違いで見える景色の顔が変わるって、君は思ったことない？」

「なんとなくわかる気がします」

「同じ被写体でも、角度、光の質や量、影の濃淡などの条件がたとえ微妙な差を生じれば、それは全く別のものよ。この場合は表現が変わるというものだけれど、もし差が大きくなれば、時として被写体は本質自体も変質させてしまう。君はこの話が人にも言えるって思えない？」

「……どういうことですか？」

難しくて全く話がわからなかった俺は顔をしかめた。しかしイクニさんは気分を害した様子なく言葉を続けた。

「つまり、短気な人がある日温厚な人になるとする。君は人が変わったと思わない？」

「思います」

「それは景色にも、たとえば植物にも言えることよ。優しそうに見えた花でも、角度や気温の変化で儚げに見えることがあるわ」

「……ああ、そういうことですか」

「そういうこと」

くすりと彼女は笑う。その笑顔を見ると、やはり年上だと実感する。そうしていると彼女は右手首に巻いた華奢な腕時計を一瞥した。
「そろそろお昼にしない？」

「そうしますか。時間的にちょうどいいし。下にジョイフルがありますから、そこで昼にしますか？」

「今日はやめておきましょう」

「なら、どうします?」

「コンビニで買って芝生の上で食べましょう。せっかく君が案内してくれた、綺麗な公園なのだから、肩を並べて景色を楽しむことが一番正しい楽しみ方でしょう?」

「そうしましょうか」

高ぶる気持ちを抑えて俺は提案に乗ることにした。イクニさんから提案してくれたことは、かなり大きく感じた。早速俺たちはコンビニを探しに公園を出た。コンビニはそれほど遠くはなくて、公園に戻ってきた頃は三十分程度しか経過していなかった。ちなみに俺が手に提げているレジ袋には、昼食だけでなくお菓子まで入っている。もちろん彼女が選んだもので、楽しむ気満々であった。嬉しいけど。

席は彼女の希望に従って、見晴らしのいい緩やかな傾斜になった。ここもまた芝生が埋められている。先に女座りで腰を下ろしたイクニさんの肩に並ぶように、何気なく俺も腰掛けた。この何気なさ俺の人を警戒させない心得の一つだ。そしてレジ袋から取り出したサンドイッチを彼女に渡して、俺もメロンパンを手にとってぱくついた。

特に会話もなく適当に食事を取っていると、気分は遠足に似ていた。似てるだけで別物だけど。目をやれば、見た目とは裏腹に彼女は結構なスピードでサンドイッチを咀嚼している。そして最後の一口を口にすると、カップに突き刺さったストローでコーヒを啜った。

「この辺りは暖かいのね」

「住みやすいって聞きますね。俺には理解できませんが」

「ここ以外の町に住んでみればわかると思うわ。もしくは私みたいに旅を試みるなんてね」

「そう遠くない内に東京に行ってみますよ」

「すごい意気込みね。その力強さは確固たる目的が見つかったと思

つていいのかしら」

即答して見せると、イクニさんは驚きではなくただ心境のうかがえない視線を向けてきた。

「まだ納得のいく夢はないですけどね」

俺がそれに苦笑で返すと、彼女は落胆したように溜息をこぼす。

「……少し期待したのに。先に場所を決めてどうするつもりかしら？」

「絶対これだと胸を張れるものを。妥協をしたくないんですから。そう責めないでくださいよ」

イクニさんの叱責にますます俺は苦笑した。そこまで彼女に言われるいわれはない気がした。察したのか彼女は「そうね」と口にするとかすかに笑った。笑われた意味がよくわからない。

食べ終わったイクニさんはおもむろに箱から煙草を取り出してくわえた。ただし、火は灯さなかった。

「ライター入りますか？」

「口元が寂しかったただだから気にしないでいいわ。それに今はこの空気を堪能しておきたいもの」

涼しげな彼女の横顔に俺は自重して、時折コーヒーカップを啜りながら沈黙を通した。しばらくして、イクニさんが俺に流し目を送ってきた。

「……煙草の臭い」

「そこまで臭いますか？」

何度が指摘を受けているせいと、前回の内容をよく覚えていないせいで余計に焦る。しかしイクニさんは特に不愉快な顔でも声でもなく、ひたすら他人事のように言った。

「私がおいに敏感なだけよ。しかしこれだけ言ってやめられないなんて、君もジャンキーなのね。……君は何のために煙草を吸っているの？」

「何のために吸っている、ですか？」

しばらく考え耽て、

「……好きだから。それではだめですか？」

「いいえ。素敵な答えだと思うわ」

「素敵ですか」

「答えることができるということは、自分の意志があるということでしょう。素敵ではなくて？」

「ああ、良いですね、それ。イクニさんはなんで吸っているんですか？」

「………長い人生の小休止ね」

そうして談笑を楽しみながら食事をとって景色を堪能してるとき、そろそろ買い込んだお菓子も底をつこうとしているのを見計らって、俺はある提案をした。

「もう一つ案内したいところがあるんですけど、どうですか？」

「あら、本当？ それは楽しみだわ」

その薄い笑顔が、わくわくしてるように見えた。

この時期の瀬戸内海は、空気が澄んでいるおかげで普段は見えない遠くの島々が肉眼で眺めることができる。しかし、そのことを知ってる人は多くないと思う。浜辺や防波堤に来る人の多くは釣り目的だからだ。今日はちょうどよく俺たち以外は誰もいない。

眼前に広がる、さざ波に揺れる深みのある青の海。潮風が吹き荒れて、イクニさんが髪を押さえるが、ばさばさと乱れていくところを見ると大して効果はないようだ。しかし嫌な顔をしていない。むしろ、こそばゆそうだ。

ここはさっきの公園から自転車で二十分程度の距離にある防波堤だ。到着して早々、防波堤の上を危なげなくかつかつとゆくり歩き始めた彼女は、今は立ち止まってずっと景色を一望している。そんなわけで俺は退屈だ。

「……これはここだけでしか見られない景色ね。羨ましいわ、君たち」

「何か言いました？」

空気を切るような鋭い潮風と広い景色でよく聞こえなくて、俺は

聞き直すが、イクニさんは乾いたような微笑みで返すだけだった。

やがて潮風が引いた。乱れるほどになびいていた彼女の髪がぱらぱらと重力に従って下りていく。残ったのはかすかなさざ波の音だけだ。そこで初めて彼女はくわえた煙草に火を近づけた。しかしすぐには灯らず、手で覆うようにしてからしばらくして、濁ったようなオレンジが輝きだした。すらりとした姿勢で眼前の景色を眺める彼女が、時折煙草を吹かす様はまるで、非常な決断を胸に秘めながらも毅然としようとするように見えるようだった。

「どうですか？」

いつまでも黙って立ちつくしているのも忍びなくて聞いてみる。

彼女はかすかに頬をゆるませて言った。

「素敵ね」

偽りのない笑顔だった。

すっかり辺りは冷え込んだ黒に覆われていた。母親には連絡しているから問題ないだろうけれど。このまま帰宅するのも面白くなく、途中道を外れて美帆の家に寄った。もしかしたら美帆の両親が帰っているかもしれないが、そこはあえて気にせずインターホンを押す。

「はい。あ、せんぱい。今日はどういったご用件ですか？」

がちやりという音とともに開いたドアから、美帆が明るく出迎えてくれた。妙に敬語なところは、普段来客なんかを迎える癖だろう。そのまま俺は美帆にリビングへと案内された。目論見通りである。

時間的には夕食時だが、キッチンに美帆の母親の姿はなく、四人掛けのテーブルの上には何も置かれていなかった。

「お母さんたちはもうしばらく出張なんです。せんぱいはまだ夕食食べてませんか？」

「その前にちよつと寄り道したからな、食ってない」

「じゃあ、食べていきませんか。ちょうど今日、精肉店で安くして

もらえたんです」

につこりとした美帆の笑顔は、一見、裏表がないように見える。

「……作って欲しいなら言えば？」

「作ってください！」

「即答かよ……」

ぎくりともせず、素直に美帆は叫んだ。そこまで白状されれば、無下にするのも大人げない。

「俺が作ってる間、風呂に入ってきたら？」

「え？」

美帆は目を丸くして、

「まだいいですよ。手伝いますから」

「シャワーぐらいでも浴びて来いよ」

「……はい。お言葉に甘えますね」

俺が引かないと見るや、渋々と、でも最後はほっと笑ってリビングを出て行った。

さっきからおいを気にしているのが見え見えである。伊達に付き合っていないのだ。たくさんの女と。……里織に鼻で笑われそうだ。想像して、少しげんなりとした。

さて、料理を始めようか。気持ちを改めて、俺は近くに掛けてあったエプロンを通して冷蔵庫に手を伸ばした。

三十分以上が経って、櫛で髪を梳かす美帆がリビングに戻ってきた。さすがにタオルで髪を乾かしている様を見せるのは恥ずかしかったのか。前にうつかり見てしまつて恥ずかしがられたことがある。

一方で、俺の方も支度は済んである。即興だが上出来だ。

俺が一人満足していると、美帆が申し訳なさそうな顔をして近づいてきた。

「すみません。全部せんぱいに任せてしまつて」

「そんなことより腹減ってるだろ。冷める前に食べよう」

「はい。それにしても、先輩の手料理なんて久しぶりですね。相変わらず、おいしそうです。実は私、期待していたんです。せんぱい

が訪ねてきてくれて、料理も作ってくれないかなって」

「そんなこと言われたら、甲斐があるな」

美帆のささやかな願いに自然と笑みが浮かんできた。そして美帆は行儀良く両手を合わせて、

「いただきます」

一口食べて、頬を弛めて頷いた。

「やつぱりおいしいです」

それからぱくぱくと美味しそうに食べる美帆の顔を見ながら、俺も箸を進めていった。

「箸使い綺麗だよな。練習でもしてるのか？」

ふと目線で追っていた美帆の手に尋ねてみると、なんてことのない口ぶりで言った。

「お母さんが作法に厳しい人でしたから。ちっちゃい頃から言われてきたせいか、練習とか言われると違和感を覚えるです。あと、他のみんなの食べ方が気になったり。せんぱいは普通ですよな」

「慣れかあ。慣れるとそれが当たり前になるもんな。でも、そんな厳しそうな人に見えなかったけど……意外だな」

しみじみと言うと、美帆は苦笑していた。少し言い辛そうに美帆が言う。

「お母さん、猫かぶりが上手ですから。お父さんもまさかこんな意地悪な奴だと思わなかったって言ってました」

「……………猫かぶり……。実の親にすごい言い方するのな。というか、そんな家庭の裏事情を打ち明けられても、どう反応すればいいのか」

「秘密にしていたらうれしいです」

口に指をあてて美帆が笑うから、俺も釣られて笑い、頷いた。

「わかった、秘密にしておく」

「そういえば、デートはどうでした？」

神楽のことか。イクニさんのことは誰にも話してないし。

「気が向いたら教えるよ」

すると美帆は不服そうに口を尖らせた。かなりふて腐れていた。

「えー……、ケチですねー」

「好きに言ってる」

睨み付けられるのを毛ほども感じず、俺は肩をすくめた。

俺も美帆も食の早いほうだから、食事はすぐに終わった。後かたづけは二人で行い、それからはリビングでくつろいだ。ついでに、デートのことで美帆がしつこく絡んでくるから、仕方なく話してやった。

「……それはまた、すごく勝手な人ですね……」

苦笑する美帆は随分と直接的な結論をこぼした。

「まあ、もうしばらく様子見だな。ここまできると断れない」

「はは、そうですねー」

他人事のように美帆は笑い、しかし不意にどこことなく真剣な目をして言った。

「でも、たまには私の相手もしてくださいよ。教室に行ってもせんぱいがいなかったら、私、退屈です」

「わかったわかった」

おざなりに返事をしておくと、美帆は冗談っぽく笑い返した。

壁時計でほどほど時間が経ったのを確認して、俺はそろそろ切り上げることにする。

「そろそろ帰るな。母親から電話がかかってくると面倒だし」

「あー、せんぱいのところ、妙にそんなところ厳しいんだしたね」

言って玄関まで付き合う美帆に俺は靴を履いて立ち上がり、

「今日はありがとうございました。また、いつでも来てもいいですよ」

「じゃあ、また来るな。お言葉に甘えて。その前に学校の昼休みだろうけど」

「見通されてますね」

美帆はゆったりと笑った。

そして俺は手を軽く挙げて、美帆が手を軽く振るのを見て、玄関

のドアに手を掛けた。

「うおっ!？」

ドアを開けてお互い驚いた。

里織が、インターフォンを押そうとしていた指まで硬直させて立ちつくしていた。

しかしそれもすぐに、見下げた果てた目で俺をじろりと睨んでいた。

「恭一くん。美帆ちゃんの家はまだ通ってるんだ？」

「今日はたまたま。いいじゃんか、細かいなあ」

「あんたがおおざっぱなだけだ」

「お前だって美帆の顔見たくて来たんだろ？」

「私は遊びに来てるの。恭一くんは知らないだろうけれど、私は結構来てるし、自分の都合でいきなり尋ねたことない。あんた、自分がどれだけ美帆ちゃんに迷惑掛けてるかわかってる？」

「俺、そこまで相手に押しつけてないけど？」

無然と言うと、里織はあからさまに嫌そうに顔をしかめた。さつきから、無表情の里織には珍しい反応である。美帆のことで怒らせてからだっただろうか。

「全く、あまり変態なことしないでくれる？」

「俺は変態じゃないし」

顔を引きつらせてへりくだってみるが、里織の反応は変わらない。「あれだけ言って変わらないなんて、往生際が悪いというか、聞いてないふりをするというか」

「聞いてた聞いてた。きつちりするから、これ以上は関係ないだろ」
これ以上は聞きたくないと態度に出して、おぎなりに対応する。
里織は溜息をこぼすように、

「泣かせる前に落とし前つけなさいよ。そこどいて、入れない」
里織がつっけんどんに玄関をくぐろうとするから素直に脇によつて、入れ替わるように俺は外に出た。さっきの話がまさか自分のこととは露とも感じていないのか、美帆がきょとんと俺と里織を見て

突っ立っていた。俺はもう一度軽く手を挙げた。

「じゃあな」

「はい。おやすみなさい」

三学期になったって、何かが変わることはない。特にもうすぐ三年が来る俺たちが今更変えようなんて気が湧くはずがなく、いつも通り。それは三年になっても同じなはずだ。工業高校だからクラス替えがないからますます余計だ。憂鬱である。

退屈をしのげるほどの刺激なんて、もうこの街にはない。なら、夢を抱えて都会に行くべきだろうか。でもまだ、これといって夢はないと、俺は感じている。だから、今日もいつものように雑誌をぺらぺらとめくっている。

ふと、今日も来てる美帆を見て思いついたことを聞いてみた。

「お前って美術科に入ってるけど、将来絵が描きたいのか？ お前のクラス、課外授業は外でスケッチとかそなのだろ？ 俺も美術科に入りたかったなあ。デザインを考えるの好きだし。デザインといえば、やっぱりコーディネーターだろ。俺的にはお前、こんな感じがおすすめだけどな。どうだ？」

ノートの端を破いてさりとペンを走らせて美帆に見せる。押しつけた切れ端をのぞいた美帆はくすりと笑った。

「気に入らないか？」

不服に思うと、美帆は首を横に振った。

「いいえ。簡単な絵なのに、特徴をよく抜き出して雰囲気があるなあって思っただけです。これだけ描けるなら、美術科に入ればよかったですよ。そうなれば、せんぱいはちゃんとせんぱいでしたから。でしたらせんぱい。私とこれから放課後でも休日でもスケッチブックを持って散策しに出かけませんか？」

その申し出に俺は少し考えて、

「嬉しいけど遠慮する。考えてみれば俺の性分じゃない」

「そうですか。それにしても、せんぱいが美術科を気にするなんて初めてですね？ やっぱり、せんぱいもそろそろ就職と進学を考えているんですか？」

「まあな。就職だけど、どこにしようかなって考えてる」

「意外ですねえ。今までせんぱい、結論を極力避けてるっていうか、ころころ変えていたのに。さすがに本腰を入れました？」

「お前まで俺のことをって言うか？ 考えてるぞ、いろいろと」

「見えませんよ」

笑いながら結構酷いことを言う。

「傷つくんですけど」

「そんな柔じゃないですよ」

「一応言っておくけど、俺のことだからな？」

「はい」

俺の確認はまるつきり無駄と言われた気がした。

そんなとき、同じクラスの友人の一人が俺に近づいてきた。

「夏目が就職のことを考えてるなんて珍しいな。いつも適当なことばかりしか考えてないのに。高津の影響か？ それとも俺たちの頑張りが効いたか」

「お前何かしたか？」

「課題とかをいつも押しつけてくるお前に困ってたからさ。毎度お前にそれでつついていたのが成功したのかなと。まあ、絶対違うだろうけど。俺たちがいくら言ったってお前変わらないよな」

勝手に言っただけ勝手に納得した友人の落胆に、他の友人もやってきて口々に言いたい放題言う。からかわれて腹立たしかった。

「人のことばかり言うくせに自分は何もしないもんな」

「しないどころか逃げてるし」

「多分その間これしてるんだぜ、きつと」

「それはさすがに言い過ぎだろ。まあ否定はできないけど」

「まあ変態だからな、夏目は」

「今まで何人の女と付き合ってきて、何度振られたか。そろそろ落

ち着いてもいいだろうに」

「さか」

「だからお前は危ないことを言うな。いくらなんでもそれは言うな」
「盛り下がることを言うなよ」。空気を読め」

いつの間にか俺の周りは騒然とした状況に陥っていて、俺のことを言ってるのか誰のことを言ってるのか、空気で読むのも難しかった。そんなわけで昼休みが終わる頃には、俺たちは妙に疲れていた。

夜、唐突に鳴り始めた携帯を掴むと、ディスプレイには発信者田沢里織となっていて驚いた。里織が俺の携帯電話を鳴らしたのはいつぶりだろうか。でも、あまり良い予感ではなかった。そしてそれはずばりの中だった。里織の用件は美帆のことだった。ベツトの上で胡座をかぐ俺の耳に冷静に激情する里織の声が耳を穿つ。

「また昼休みに美帆ちゃんを教室に連れ込んだって？」

「すげえ人聞き悪いな。というかなんで知ってるんだ」

「独り占めして楽しむなんて、ずるい。恭一くんは勝手ね。美帆ちゃんの気持ちをないがしろにして」

本音が出たのが後ろめたいのか一氣にまくし立てる里織に、俺は呆れるというかおかしいというか。とりあえず弁解する。そんなつもり毛頭ないと。しかし、里織の声は冷ややかだ。

「見えない。恭一くんが美帆ちゃんをどう振ったのかは、美帆ちゃんの口からは聞けなかったけど。あんたは逃げ道のある言い方をした。そんな気がする。ねえ。もう一度、言ってあげたら、どう？」

今度こそはつきりと別れを言ってあげて。このままだと、あの子は板挟みだよ」

決死な気持ちを込めた優しい口調に俺は頭を掻いた。そんな気はしていた。ただ面倒くさくて俺はずっと後回しにしていた。しかしそんな俺の内心は絶対に口にしない。

「じゃあな」

「しつかりしなさいよ」

唐突に電話を切ろうとする俺を、里織は軽蔑しなかった。逆に励ましてきた。俺は笑った。不思議と鬱陶しくなかった。あつさりとした言葉が、鬱蒼とした俺を清々しくしてくれる。俺の扱いには手慣れたものだ、感嘆する。

「当然だろ」

同時に電話を切ってしまったけれど、届いているかなんて気にも留めなかった。

「あー……、美帆。俺とお前ってかなり仲良いよな？」

「はい」

放課後。一年生の教室に足を運んだ俺は、鞆に教科書などを詰めていた美帆をがらんとした自転車置き場のところまで連れ立ってきた。友人から聞いた通り、人気がないここは都合が良かった。俺もこいつも。

俺の唐突な言葉に美帆は一瞬目を丸くして、すぐに我を戻して笑顔になった。

「せんぱいのこと、すごく好きですよ。興味をそられるような話をたくさんしてくれますし、安心させてくれる、そんな気遣いがあります。実はせんぱい、私の友達に人気あるんですよ？ファッションが個性的でいいとか、同じクラスの男子に比べて大人っぽいとか」

「……それで？」

「私の友達はみんなそんな感じですけど。……私はせんぱいのこと、すごくこどもっぽい人だと思ってます。面倒がり、適当で、たいてい人に押しつけて逃げる。身勝手なところばかりなのに、嫌になれないんです。そんなところが可愛いというのもありますけど、きっかけは実はせんぱいが気遣いの人だってわかったことですね。今、必要なものはこれだろうなって考えてますよね？ うっかり忘れや見落したりして失敗も多いけど、私、せんぱいのがそれ

で好きになりました。だからなにも、大人っぽいところが好きになったわけではないですよ？だって、せんぱいって飽きっぽいでもん」

「ひどい言われようだな。まあ別れても残って、進学後まで残ってくれたんだから、それぐらいの理由はあるか。でも、悪いけど、お前をまた彼女にしようとは思わない。付き合った奴とまたなんてのは好きじゃないんだ。お前だってわかってるだろ？」

緊張感のない声で俺は言った。対して美帆は何もなかったかのよう

うに笑う。

一瞬、失敗したかと思ったが、それは杞憂だった。

「そうですか。そうですね。昼休みにせんぱいの話し相手になればまた、よりをもどせるなんて、虫が良すぎますよね。わかってます。もしかして、里織先輩と喧嘩していたのは私の無茶のせいですか？……わかります。なんとなくわかってしまいました。でも切り出したのはせんぱいの気持ちからですよ。周りが言ったから仕方なくなんて中途半端なことしませんから、せんぱいは。むしろ周りを無視して、いえ、押しつけるぐらいは平気ですますものね」

おかしそうに笑い続ける。しかし、そこに悲観した雰囲気はなく、ただ楽しかった夢を懐かしんでいるように見えた。全く。美帆は、絶対、泣きはしない。そんな女だ。どれだけ辛くても、それが悲しいことだと思ひもしない。誰かがそんな美帆をバカにしようと、俺はそれがこいつの強さだと疑わない。

「私はせんぱいの友達ですか？」

美帆は力強くにつこりと笑う。次に俺が何を言うかわかりきったような表情だ。だから俺はするりと言葉に出した。

「親友だろ」

すると笑顔のままの美帆は、口を開きかけて、しかし一向にしゃべらなかつた。けれどそれは、照れているように見えた。俺も直視するのにつけて顔を逸らし、美帆に行こうかと誘って、歩き出す。だから不意打ちだった。

「振られたって、せんぱいはみんなに誇れる人ですよ」

「ん？ 何か言ったか？」

すっかり聞こえていたのに思わず聞き直してしまった。けれど、美帆はなんでもないと首を振った。俺も何でもない風を装って、美帆と一緒に歩き始めた。

きっかけは里織だったけれど、多分、これでいいのだろう。

その日から美帆は昼休みに教室に訪ねてくることはなかった。それが美帆なりのけじめなのだろう。正直なところ少し寂しかった。でも、きっかけになった俺がそれを口にするのは違うとさすがにわかる。里織が言うほど馬鹿ではない。

そう思っていたのだけれど、翌日美帆は帰り道を一緒に下校したと言い出した。笑顔満面の美帆の前に、あまり前向きなのも困るなどと思い直す羽目となる。それでも泣かれるよりマシだが。

そんな帰り道。なんてこのない会話を交わしながら歩いていると、不意に美帆は困ったような顔をした。

「私の約束を優先してくれるのは複雑というか。断ってくれてもいいんですよ？」

「断るときは断るよ」

「それもそうですねー」

「これはこれで里織がケチをつけてきそうだ」

結局落ち着いた今の形に苦笑いすると、美帆はくすくすと笑った。まるで人ごとのようである。あの告白が一見無意味に見えるけれど、なんとなく変わったような気がした。

「その時はせんぱいをほってさとり先輩の家に逃げ込もうと思います」

「俺をほって？」

「じゃないと私まで怒られてしまいます」

「おいおい。俺の身代わりになってくれてもいいだろ？」

「末路は変わりませんよ」

やっぱり何も変わってない気がした。

休日に神楽から直接誘いの電話がかかってきたが、家族の用事を理由に断って、イクニさんがいるかもしれない公園へと足を運んだ。予想通り彼女はいた。

近づいてみると彼女は芝生の上に寝転がって空を仰いでいた。傍には古めかしいトラックが開かれてあり、中身が乱暴されたかのように芝生の上にまでちらかっていた。その中で、福本が持っていたものよりごつく高そうな一眼レフが目につかった。しわの寄った布の上に無造作に置かれてるのは、イクニさんなりに大事にしているからか。使い込まれてるくせに小綺麗なツヤがあった。

「君は暇人？ 高校生はバイトや部活で目まぐるしい生活を送ってるのではなくて？」

視線で追うと、イクニさんが目を細めていた。

「今日はシフト入れてないんで、暇だったんです。部活も部活も入ってませんし、友達には全員断られました」

嘘を交えて軽い口調で話すと、彼女は興味なさげな顔をした。

「なんだか面白くないわね」

「前に話しましたよ」

「覚えてるわ」

もう一度説明しようと口を開き掛けると、彼女は遮るようにしてつまらなさげに言う。

「良い風ねえ。君も座って日光浴をすればいいわ。気持ちいいもの。付け加えておくと、芝生の上だから背中もひんやりするから、悩みなんて馬鹿馬鹿しくなるわよ」

疑わしげにイクニさんを見下ろしていたが、根負けしてとりあえず腰掛けてみる。それでも疑惑が抜けきれなくて座ったまましていると、見かねた彼女が仰向けになるように促す仕草を何度もするから、諦めて芝生の上に背中を下ろした。すると、じわじわと背中がひんやりとして心地よくなってきた。浸っていると隣で彼女が薄く笑っ

ていた。

「嘘じゃないってこと信じていただけたかしら？」

「眠ってしまいそうです」

「そこまで素直に感じてくれると勧めた甲斐があるわ」

イクニさんの声が遠くに聞こえた。なんだか本当にまどろんでしまいそうだ。視界が少しずつ重くなってくる。

「眠りなさい。君は肩の力を抜いて、頭の中をほぐす必要があるわ。肩肘張ったって仕様がないでしょう？」

「起こしてくださいよ？」

彼女の了承の言葉に俺は意識を落とした。

再び目を覚ましたとき、携帯のディスプレイで時刻を確認すると、あれから一時間と経っていなかった。

上半身を起こすと、隣でまだ仰向けになっていたイクニさんが、顔の上にかざした一眼レフのファインダーから俺に視線を移動させて目を瞬いていた。

「起きるのも早いね。来た頃と比べてすっきりした顔してるわ。でもまず、顔は洗ってきなさい。すごいわよ」

言われるがままに俺は近くの公衆トイレに向かった。じっくり見るまでもなく、むくんでいた。俺は水を出して洗顔し、丹念に顔を揉んでイクニさんのところへ戻る。

未だ寝ころんだままのイクニさんは窺うように俺を眺めて、

「気分爽快？」

「かなり」

「いつもの君だね」

「俺、そんな顔してました？」

「気がしただけよ。私がわかるんだから君の友達の方がよくわかっていたと思うわよ」

他人の指摘にはざつくばんな彼女の物言いに、ちょっとだけむかつ腹を覚えたが苦笑で留めておいて、再び隣に腰掛けた。それ以降何も喋らずただファインダーをのぞき見る彼女が気になって声を

掛けた。

「普段、風景を撮っているんですか？」

「ええ。旅行家には必須の趣味よ。写真ではなくて、絵を描く人もいるけれど、私は下手だからね。でも不思議なことに、写真は上手だって褒められるの。君は上手な人？」

「……下手、ですね」

齒切れ悪く答えると、彼女の知性的な目は「そう」と言葉短く答えていた。どことなく残念そうだった。しかしイクニさんは目を細め、むくりと起きあがって俺に一眼レフを差し出してきた。

「実は君の写真も収めているの。見てみる？」

俺は好奇心に負けて写真を回した。確かにいくつかある。気づかなかった。中にはかなり間近に撮られたものであるのに、この写真の時、俺はシャッター音にまるで気づかなかった。

啞然としていると、イクニさんが悪戯っぽく微笑んだ。数少ない彼女の子供っぽい仕草に、どきりとする。

「意外と隙だらけね。要領の良さは褒めてあげるけど」

無視して俺は写真を回していく。そして寝顔の写真を過ぎた辺りで最初に戻った。しかし返品する前に俺は彼女に首を回して、

「余計なものまで撮らないでくれませんか？ 消しますから」

「こら」

するりと奪われた。運動神経が特別優れてるとは言えないけれど、人並みにはあるはずなのにカメラを奪われて驚いた。しかしすぐに俺は腹を立てた。

「さすがに人の寝顔を撮るのはどうかと思いますよ。消してください」

「冗談よ。………ほら消した」

彼女は淀みない口調で言う、しばらく手を動かした後で一眼レフを渡してきた。確認すると確かになくなっていた。返しながら、

「案外、子供っぽいですね、することが」

「当然よ。君より年上だからって、人間なんだから、悪戯だってす

るし、泣くことだってあるわ。もしかして君は大人のことを勘違いしてる？ そんなはずないか」

俺が言う前に彼女は俺の顔をじっと見て、勝手に納得を始めた。これ以上追求する気が起きず、俺は話題を変えた。

「写真、本当にうまいですね。輝いて見えるって言うか、綺麗です」
「ありがとう」

そして彼女の笑顔の前に俺は躊躇い一つも打ち明けてみる。躊躇ったのは、彼女の秘密主義に触れてしまうかもという恐怖があったからだ。

「イクニさんは、生まれ育った場所以外を見たいと思ったから写真を撮っているんですか？」

秘密主義のはずの彼女は、答えてくれた。

「……そうね。こうして土地を回りながら写真を収める前は、私も君みたいに小さくて狭い世界に埋没したくないって、一生を過ごしたくないって思っていたわ。自分は優れた人間だ。そう思っていたから抗わずにはいらなかった」

「そこまで俺、話しました？」

「わかるわよ。似てるもの」

「……続けているってことは、地元に戻ることに躊躇ってるからですよね？」

もしこの言葉に肯定してくれれば、それは俺が歩もうとしている人生を肯定してくれているのと同じことのはず。だから俺は期待した。

「わからないわ。もう意地になっているからね」

「意地？」

「戻ってしまったら、それは私の人生の全てを否定してしまう。そう考えてしまうの。両親が私の夢を肯定してくれただけ、私はすごく恵まれているはずなのに、怖いよ。何もなかったことになるわずかな可能性が。だから意地になってるの。するとそこに、私と原点が似てる君がいた。君を見て私は思い出したわ。多少意地を張っ

ても、やり直しがきくと信じられた君ぐらいの頃をね。そして気づいたわ。私は随分と長い間意地を張っていたんだなって」

「イクニさんの地元も田舎だったんですか？　こんな感じの？」

あからさまな誤魔化しにイクニさんは特に苛立つことなく、素直に答えてくれた。どこかよそよそしい真顔だった。

「いいえ。君が羨む都会、の端の生まれ。しょっちゅう都心には行っていたけれどね。でも、華やかであればあるほど、裏はとてמודす黒いものよ。裏通りや裏路地なんて、生ゴミとゴキブリで溢れかえっているわ。だから私は都会が嫌い。田舎に視点を向けて、カメラを担いで足を頼りに全国を回ったわ。さっき私、君と原点が似てるって言ったわね。確かに原点は似てる。けれど、決定的にまで方向性が違うわ。まるつきり逆。だから最初見た頃から私は君が気になっていたんでしょね、似てるだけなら見向きもしなかった」

辛辣にも聞こえる彼女の言葉に、俺は耳を傾けなくなかった。俺にはまるで敗北者の言葉にしか聞こえなかった。認めたくなかった。それが俺の末路だと思いたくなかった。

だけと言ってやりたいことがあった。

「イクニさんは、ずっと後ろ向きに考えていくんですか？　ずっと」

「君にはわからないわ」

一人の大人の人生は、そんなみつともない言葉でまみれているのだと思わされると、俺は悲しくなった。しかし唐突に彼女はぴしゃりと言った。

「人のことより！　君はどうなの？　私の話を参考にするにしてもしないにしても、時間がないから焦っているのではなくて？　だったら、シャキツとする。私は後悔したくなくて意地になっている。これだけ私の話を聞いたなら頑張ろうって思うのが男の子でしょう。後悔したくないから血反吐を被っても夢に追いつがちなさい。みつともないって思わない。私は楽しみにしてる。限られた選択肢の中で君がどう進んでいくか。子供である以上、世界は狭い。でも世界が広いと思えたとき、目の前にあるのは両手で数えるほどの選択肢

それは都会であろつと田舎であろつと変わらない縛り。私と少しだけ似た君の人生が本当に楽しみよ」

俺よりも先を生きて、俺よりも濃密に生きてきた彼女の言葉は、口調が清々しくも、重かった。そして気づいた。今の彼女に悲観なんて色はなくて、むしろ力強い。ならそれだと、さっきのよそよそしさは昔の彼女への自嘲なんだろうか。だけど、本当のところはどうでもいい。それより俺の選択を肯定してくれる存在がいることがとても嬉しかった。さっきまでの憂鬱さが忘れてしまえるぐらいに。

第三話

第三話

これで何度目かの神楽とのデートは、やっぱり賢志らを連れ立つてのものだった。そうでないと神楽以上に、俺が困る。面倒くさい奴に引っかけたと今更後悔しても詮無いことだとわかつてはいても、溜息がこぼれる。

いつも通り福本の背中に隠れるように登場した神楽に挨拶を交わして、俺たちは電車に乗ってM市へと向かった。

馴染みの大型商店街はそれなりの盛況ぶりだった。これが平日になると、がらんと人氣がほとんどなくなるが。俺たちは以前と同じ店で昼食をとり、商店街を歩き始めた。

ここではメンズものも品揃えが良いので、ファッションに疎い男でも思わず立ち寄ってしまうことが多い。高校の友人はそんなパターンだ。そしてデートの主役がいかに女性にあれども、これだけメンズが揃えば、彼氏の服を自分で見繕いたいと女は思う。そんなわけで福本はレディースだけでなくメンズの専門店にも足を運び、賢志を疲弊させていた。

ちなみに俺はそんな二人にはぐれないように目を光らせながら、俺や神楽の服を半分冷やかに見繕う。必然、着せ替え人形状態になる神楽は、俺が勧める服をいじましく試着してそのたびに似合うかと聞いてくる。これだけなら可愛いのにと勿体なく思えてくる。

この通りの突き当たりにあるデパートが抱える、古着屋のテナン

トで掘り出し物がないかと物色した後、すぐ近くの路地の古着屋にも足を運んだ。そこで白が基調で雪の結晶の模様が編まれたボン付きニット帽を神楽にプレゼントした。喜ぶ神楽は早速被っておずおずと俺を見るから、俺は如才なく褒めた。賢志がからかってきたが適当にあしらった。

それまで口だけは開くことのなかった神楽が、ニット帽をプレゼントしたあたりから、ぼつりぼつりと口を開き始めた。

「……こつちより、この服の方が似合ってるない？」

「それだと少し子供っぽくないか？」

「ぽくない。似合う」

気遣い含みの俺の結論に神楽は語気を強めて睨み付けてきた。はつきり言う「と神楽の感性は子供っぽかった。そういえば喫茶店で注文したのはメロンソーダだったな。そんなことが今更思い出される。神楽が負けじとばかりに仏頂面で、さっき俺が眉をひそめた服を俺の視界いっぱいに広げてきた。そんな仕草も子供っぽい。意地っ張りというか。しかし、前みたいに癪癪を起こされたくもない。」

「このフリフリがいい」

「似合うと思うよ。これも良くないか」

頷きはするが、その後でそれとなく俺のおすすみを勧める手段に出た。これなら怒らせる心配は少なくなるはずだ。案の定、神楽は俺が渡した服を広げてまじまじと品定めして、

「これも可愛い。でも……、試着してみる」

自分が選んだのと勧められたのを困ったように交互に見て、試着室に飛び込んでいった。

「やっぱり要領良いよね、ナツくん。けんじくんなら大慌てなのに、すぐに対応してる」

「賢志と同じにしないでくれない？」

いつの間にか近くに立っていた福本に笑いかける。しかし周囲を見ると賢志がいなかった。

「けんじくんは今試着してるよ」

「不満たらたらじゃなかったか？」

「はは、言つてたよ。でも、私の勧めた服を着てくれる辺り、愛を感じちゃう」

その発言にはかゆみを覚えたが、賢志と福本らしかった。

「神楽つて見た目と中身にギャップがあるな」

「そこがあやの可愛いところでもあるんだけどね」

顔を立てているのかどうか微妙な発言である。

お嬢様な外見で中身がかなりの子供というのは、かわいいを飛び越して異質だと思うけれど。さすがにそこまでは口にできない。

「ナツくん」

見ると、いつものゆるんだ顔ではなく、真面目な顔つきだった。

「あやなりに頑張ってるの。今まで努力しても報われなくて、私以外とは極力関わらないようにしてたあやが、自分から動いてるの。多分、癪癪持ちはずっと変わらないけどね。できるなら、ナツくんなりに向き合つて接してほしい。嫌なら嫌つて言つてほしい。頼んだよ」

そんな言葉までさばさばとした口調で言われると、逃げることはできないと思わされてしまった。意外と俺の周りには押しの強い女が多い。

神楽は神楽なりに一生懸命か。わからなくもない。そうでもない。と、あんな内気な自己中が一人で俺に告白しに来ないだろう。

カーテンが引かれる音に顔を上げると、精一杯の笑顔を浮かべた神楽が立っていた。

「似合う？」

「んー。もう一工夫ほしいなあ。何かないかな」

近くの棚などを物色して、気になったものを神楽の姿に被せてみるが、一向に納得のいくものはない。

「神楽。次はこっちの服を着てみて」

神楽はむすつとした顔でそれを受け取って乱暴に試着室に戻っていった。舌の根も乾かぬ内に手のひらを返されたから拗ねたのかも

しれない。気にしないでおくと、

「もつと褒めてあげればいいのに」

「服に関しては妥協はしたくないからな」

笑う福本になんてことなく返して再びコーナーを物色する。この帽子は微妙だな。これは色がださい。俺の目にかなうものはほとんど見つからない。

いつの間にか戻ってきていた賢志と、服のことなどで相談していた福本がくすりと笑った。

「ナツくんたら、私以上に真剣だね」

「これがこいつの趣味みたいなものだからな」

「お前みたいに趣味がないよりマシだろ」

「今はあるぞ。写真だ。お前より上手いぞ。お前は下手だもん。携帯で撮った写真、春に見せてみるよ」

「写真撮ってるの？」

興味津々といった顔をした福本がじつと見つめてきて、俺は少したじろぐ。なんとなく、いつもの自信がでない。相手が熱心にするものと同じものを、しかし俺は遊びでしてるから、後ろめたいような気持ちになった。あとで、賢志をいじってやると決意して、口を濁しながら言った。

「まあな。お前と比べたら下手の横好きになるけど」

「そんなことないと思うよ。してるってことがすごいと思う」

「こいつ、すぐに飽きると思うけどな。今度はいつまで保つだろうな」

「けんじくん。ほんとのことだからって、水を差したらだめだよ」

「お前だって似たようなことしてるだろ。お前の世話焼きもいい加減にしておかないと、おせっかいだ」

口論を始める二人に巻き込まれないように距離を置いて物色を始めた。福本は美帆と似てるけれど、他人との距離感が決定的に違う。福本はなんだか壁がない。さすがに土足ではないものの、踏み荒らされればほとんど同じことだ。うっかりでそそかしいところも美

帆との違いだ。美帆はあれで隙がない。

「……あんまりいいのいな」

落胆する。そうしてると、肩を叩かれた。振り返ると、気後れした風の神楽が立っていた。

「これがいいなって思うんだけど……」

尻すぼみする神楽は、タートルネックの丈の短いワンピース姿だった。初めて見るチョイスだ。俺はじっくり見て頷いた。

「それが一番似合ってるな」

年相応なんて言葉が出てきたけれど、口にすれば怒るだろうから言わないでおく。これが賢志あたりなら、あえて言ってみたりもするのだけれど。

俺の言葉に喜んだ神楽は早速レジに行った。

そんな感じで俺たちは商店街を回っていたが、偶然にも美帆と里織に出くわした。美帆はともかく、里織では何を言われるかわかったものではない。

「せんぱい、こんにちわ。けんじ先輩と福本さんと神楽さんもこんにちわ。なんだか初詣以来の勢揃いですね」

「節操ないって思ったのこれで何度目かな？」

「かもな。デーとしてるんだけど、お前らは？」

露骨に無視された里織がじっと見つめてきたけど気にしないでおく。

「お買い物です。さとり先輩に、化粧品でひいきにしてる店を案内してほしいと、お願いしたもので」

だらりとしている里織を美帆が連れ出したという訳か。

「せんぱいたちはもうお昼食べました？」

「もう結構前に」

もうお昼時からかなりはずれた時間帯だから当たり前だけど。

「それは残念です」

笑顔で返す美帆に、にこにこしながら福本が声を掛けた。

「私はさっちゃんたちとお昼したいなー。食べてないんだよね？」

「いえ。ただ休憩がてら何か食べようかなって。それならたくさんのほうが楽しいと思っただけです」

空気を読みながらも正直に話す美帆に心打たれたように、福本がことさらにここにこして言う。

「だったら決定じゃない。けんじくんもあやもいいよね？ ナツくんもちろん」

「いいよ。いやなんてありえないし」

反対する理由もなかった。他も特に不満そうな顔もしてない。

マツクの店内の席の座った俺たちは思い思いに頼んだものを好き勝手に食べる。俺の向かいに座った神楽がなにやら一生懸命にハンバーガーを食べていた。そこに美帆が話しかけた。

「神楽さん、その紙袋の中身は服ですか？」

「うん」

蚊の鳴くような声で神楽が答えると、うきうきと美帆が身を乗り出すように聞いた。

「せんぱいに選んでもらいた？ センスが良いですからきっと良いの選んでくれますよ。自分のだと奇抜というか個性的なものを選んだりしますけどね」

「俺の勝手じゃないか？」

「おかしいともダメとも言ってますよ。むしろ、すごいと思います。私にはそんなチャレンジできません。雑誌で無難に選びます」

軽く諭して美帆はコーラを啜る。隣でチキンナゲットを口に放り込んでいた里織が口を開く。「それが普通だと思う。恭一くんが変なだけ。それを仕事に生かそうと思わないのも不思議。どうせ、まったくだらないことで悩んでいるだけだと思うけれど」

「くだらなくねえよ」

「ナツくんはもう進路考えてるの？」

以前、好きなものを仕事にするべきかと悩んでいたからか、俺の斜向かいに座った福本の目は真摯に見えた。

「いや、ただだ。そういえばお前はどつするの？」

「ん？ ああ、カメラのこと？」

鞆からあの一瞬レフを取り出す福本をまじまじと見つめた。

「いつも持ち歩いてるのか？」

「部の活動にかこつけて、けんじくんと電車を使って遠くまで行ってるの。写真っていうのは特別な一瞬を収めたものじゃない？ そう考えると心惹かれたものを撮りたいなあって思っても撮れないときの方が多いでしょ？ それに行けるところまで行きたいって感じて、市内だけじゃ物足りなくなってきた、でも一人だと楽しみに欠けるからけんじくんを連れてるんだ。それを続けていたらほとんど習慣になっちゃった。持たないと逆に落ち着かないし」

「習慣と言うより癖だろ、もはや。それに途中で川遊びにかまけたりで、写真を取り忘れるのもしょっちゅうだし、口で言うほどしてないぞ」

「写真部のくせに風情がないなあ。それにそれは休憩。神経が尖ってきたら、良いものなんて撮れないんだよ。それにくつろいでるときにこそ、思わぬ発見があったりするの」

「あれだけはしゃいでいるのを見ると、とてもそうには見えないな」

茶々を入れるというか、暴露する賢志に福本は口を尖らせた。すると、神楽がおずおずと俺を見ているのに気づいて尋ねてみた。

「どうかした？」

神楽はびくりと肩を強ばらして、慌てて目をそらした。俺が怪訝な顔をして神楽を見続けていると、上目遣い気味になって、

「夏目くんは夢ってある？ 進路じゃないやつ」

俺はじっくり考察してみるが、それらしいものは思いつかない。いや、判然としないというのが正しい。

「……ない、な。デザイナーとか考えたことあるけど、絶対じゃないし」

「……ないんだ」

どことなく落胆した風だった。反対に美帆は楽しそうに顔をほこ

るばせて、

「せんぱいがデザイナーっていうのも面白そうですね。将来は世界的デザイナーにまで上り詰めそうです」

「ありえない将来像だな」

「想像できない。もし実現したら笑いそう」

「いい友達ができてうれしいよ」

皮肉るが賢志も里織も痛くもかゆくもない顔をしたから余計鬱陶しかった。素直に喜んでいるのは美帆ぐらいだ。

「お前らこそあるのか？ 特に進学校だし、進路でざわついている頃だろ」

「私は自己推薦で名古屋の大学を決めてる。担当には落ちるなんてありえないって言われた」

さも当然のように言う里織に、俺と美帆は苦笑いだ。福本なんかは自分のことのようにすごいと騒いでる。

「学部は？」

「外国語学部フランス語学科」

すらりと口にする里織に迷いや後ろめたさなんて微塵も感じられなくて、少し圧倒されてしまう。

しかしその空気を吹き飛ばしたのは福本の大声だった。限界まで目を見開いた福本は、がたがたと机や椅子をふるわせるほどに驚いていた。

「ええええええええええ！？ それって外国語大学！？ 下手な東大生でも落ちるレベルの大学なんだよ！？ それを自己推薦で、しかも教師の保証付きってさっちゃん、そんなに頭良いの！？」

「へえ、そうなんだ」

俺や他の面子も単純に感心した気持ちだったが、福本は気にくわないのか、全員に噛みついてきた。

「みんな！？ あの日本の最高学府の人でも落とされるところなんだよ！？ すごいことだよ！？ というか、けんじくんは進学校の生徒なんだから、感覚的にわかるじゃない！？」

「驚いたところで俺の進学に影響ないからな」

「ごめんなさい。漠然とすごいとしか言えません」

賢志の無情な言葉と美帆の苦笑いの前に、福本はがくりと肩を落とした。俺は二人の間ぐらいの感想だった。

「美帆は何かあるのか？」

「高津には優しいんだな」

「私はないですねー」

「何かあるだろ、夢とか」

「んー……？ やっぱり、思いつきませんねー」

「それで賢志は？」

矛先を向けると賢志はかなり渋い顔をして俺を睨んできた。嫌がらせのつもりはなかったけれど、そう受け止められたらしい。

「けんじくんは丁大だよ。しかも法学部が第一志望なんだ」

しかし福本があつさりとはらしたから、賢志はますます顔をしかめて、しかし諦めたように溜息をついた。

「そうだ」

そんな賢志の態度に福本はご立腹な様子である。

「胸を張っても良いのに。みんなだって、けんじくんの将来を馬鹿になんてしないよ」

「からかわれるのが嫌なだけだ。お前だって散々からかってきただろ」

「えー、すごいって言っただけじゃない。何もからかってないよー」

心外だと福本が怒ると、里織と美帆が、

「けんじ先輩って結構志高いですね。普段は渋々みたいな顔してるのに」

「素直になった方がいいと思う」

賢志はほら見るみたいな顔をして鬱陶しげにかわしていた。

「神楽は何か決めてるのか？ 願望でもいいけど」

「……………私は……………」

神楽は考え込むように、濁すように目線を下げて、

「何も……」

マックで話してるうちに福本と美帆が結託して全員で商店街の化粧品のお店に向かうことになった。道草を食いつつ、到着すると賢志が嫌そうな顔をするから福本が腕を組んで無理矢理に店内に連れ込んだ。

俺と賢志を置いて、福本たちはあれこれと口紅で花を咲かせていた。賢志と違って俺は時折神楽に質問されて淀みなく答える。女との付き合いで培った知識はこんなところで役に立つ。

「この色はどうですか？」

「少し派手かな。こっちの薄い色の方がみつちゃんに合うんじゃない？　せつかく肌が白いんだし」

「福本さんのほうが肌白いですよ。福本さんはこのうつすら紫がかかったのが似合いそうです」

「そう？　ピンクが良くない？」

「普通すぎじゃない？　あやの持つてるその色可愛いね？　あやはその色好き？」

「好き、かな」

「ほんとですね。すごい、全然気づきませんでした。これのお試しあるんでしょうか」

「……………あ、これ」

里織は手に取ったお試しと書かれた口紅を、か細い声で鳴いた神楽の手の平にのせた。手渡された口紅をまじまじと見ていた神楽を見かねたのか、福本がにこにこ笑いながらそれをとった。

「あや、私が塗ってあげるね」

宣言して、口紅の先を神楽の唇に向ける。そして、言われるがままの神楽のそつと開いた唇にすつとさすと、確かにその色は神楽の雰囲気にとても良く合っていた。お嬢様然とした雰囲気がより引き締まり、パーティー会場に紛れてもおかしくないように思えた。

くるりと神楽は俺に向き直り、照れで赤くなるのをこらえるような顔で聞いてきた。

「似合う……？」

「かなり似合う。その色にすればいいんじゃないか？」

「じゃあ、そうする」

神楽は嬉しそうに棚からその色の口紅を抜き取って、大事そうに両手で握りしめた。福本が隣でにこにこ笑っている。

「よかったね。私はどれがいいかな？ けんじくんもこっち来て選んでよ」

美帆と里織もまだ選んでいた。というより、いつの間にかダブルデートでなくなってる。

「さとり先輩は朱色が似合いそうですよ」

「美帆ちゃんはこの淡いの。さつきより薄い方が他が際だつと思う」「んー、迷いどころですねー。せんぱいは、さとり先輩の色はどれだと思います？」

「美帆ちゃん。こんな奴に選ばせないで」

「少し待て」

里織の不満は脇に置いて、美帆が両手に持った色違いの口紅と、棚に並んだ口紅を見比べる。里織がますます目を尖らせて、

「だから選ばなくていいって言った」

「これじゃね？」

棚の真ん中あたりにあった口紅を引き抜いて美帆に差し出す。手に取った美帆はそれと里織を見比べてにっこり笑った。

「さすがせんぱい。この色、きつとさとり先輩にすごく似合います。はい、さっそくつけてみてください」

「……………わかった」

思うに恐ろしいほどまで葛藤だったのだろう。そう思わせる目の色に俺が呆れている間に、里織はすつとひいた。少しでも接触時間を短縮したかったのかもしれない。

どこことなく怖い無表情を美帆に向けて里織は尋ねた。

「どう」

「やっぱり似合います。よかったですね、さとり先輩。泣き黒子と

の相性も抜群です」

美帆の掛けなしの褒め言葉に、里織は諦めたように吐息をついた。
「……仕方ない。美帆ちゃんが手放しに喜んでることだし、買う。
恭一くん、ありがとう」

普段突き放したような物言いのくせに、非の打ち所ない結果には
素直に感謝するところは可愛いと思う。しかし、付き合っていた頃
にたまたまそれを口にする、「合理的に考えただけ。人付き合い
には欠かせないこと」と返された。多分、今もそう答えるだろう。
「普段面倒くさがってるのが言っても説得力はない」と、これは里
織に対する賢志の弁だ。里織と付き合う前も後も、俺たちは三人で
つるむことが多かった。それは美帆が加わっても同じことだった。
もしかしたら、里織が進学後、俺たちとの付き合いをほとんどなく
したのは、寂しいを自覚しないようにするためのなのかもしれない。
……いや、それはないか。

結局、福本以外の女は口紅他、化粧品を買って、その店の前で里
織と美帆と別れた。携帯のディスプレイに目を落とすと、まだ少し
時間に余裕がある。あと、もう一軒を冷やかすぐらい。それを福本
に伝えと、人差し指を立てられた。

「じゃあ、あの喫茶店に行こ。えと、名前は……」

「ミルフィーユ」

デートのたびに通ってる商店街の入り口付近の喫茶店だ。

「そうそう。ミルフィーユ置いてないくせに名前にしてるっておか
しいよねー」

「今更か」

「気づいていたなら教えてくれてもいいじゃない。何よ、そのばか
にしたような顔」

「実際、馬鹿にしているんだけどな」

「私をばかにして楽しい？」

とても怒ってるようには見えない顔で賢志を窺う福本を見て、俺
は呆れた。

「痴話げんかはさつさと終わらせて行くぞ」

切りをつけて神楽の手を引いた。神楽は驚いて恥ずかしそうに目を伏せた。もう少しの間ぐらい神楽にいい目を見させても罰は当たらないだろう。

メロンソーダーを頼んだ神楽以外はコーヒーを注文した。店内は時間的に私服姿の学生が多かった。それでも飲み物は割と早く運ばれてきて、俺は疲れを飲み込むようにコーヒーを啜る。

「今日はなんだか、いっぱいはいだね。次はみっちゃんたちも誘って遊びに来ようか？ あやは楽しかった？ ナツくんを手を引かれたけど、どんな感触だった？」

本人を前にして何を聞いているのか。ばつの悪さとか気恥ずかしさとかが頭にでてこないところもまた美帆と違うところだ。

恥ずかしさで俯いてしまった神楽を福本はずっと笑いながら見つめている。そこでやっと賢志が間に入った。

「とりあえずそれは恭一のいないところでしろ。余計に言いにくいだろ」

「それもそうだね。そういえばナツくん、女の子にいっぱい見られていたよね。ファッションが独特だから目を惹かれるのかな？ ほつておけないんだ。昔からもてたんじゃない？ 絶対もてたね」

「昔からそれなりに人気あったぞ、こいつ。口が良く回るから、面白い話をすればすぐに彼女ができる。逆を言えば別れた回数も多いけどな。手痛い失敗もあったと思うが、そのあたりどうだったよ」

「ねえよ。僻みですか」

余計なことを言うなと睨みをきかせて、コーヒーを啜る。全く昔からろくなことを言わない。だからもてないんだ。

「違う。俺がもしお前みたいに周りに気配りすることになると思うと、ぞつとする」

「お前、それは随分な言い方だろ」

「あや、ここでナツくんのフォローをすれば、好感度あがるよ」
「ほんと？」

好きにすればいいけど、余程上手い言い方でないと逆効果になるんだけど。お前らにできるとは思えない。案の定、何一つ言えず、神楽は俺に話しかけることはなかった。

イクニさんを見送るのに、俺はあまり綺麗ではないホームに立っていた。隣に立つ彼女は初めて会ったときと変わらない格好で、足下にはやっぱり妙に古めかしいデザインでぼろぼろのトランクが置かれてある。彼女が乗る電車はもう少しで来るらしい。それぞれの口元には、セブンスターとジタンがくわえられ、どちらも濁ったような色の灯りが踊っている。そして燃えかすのような煙が頭上に立ち上り、でもそれもすぐに途切れる。煙の一生の短さが、何故か残念に思えた。

「見送りご苦労さん。もうそろそろ来るけれど、見送りだけでいいの？ キスぐらいまでなら許すわよ」

好きに來ているから別段気には障らなかつたけれど、でもその口ぶりが彼女らしくないような気がした。今日の別れも、昨日唐突に報されたものだし。

「どうせしてもらつたら、心底好きだからするキスがいいですね。同情はいりません」

「それでこそ君ね。もしかして進路が決まつたのかしら」

「何でそう思うんですか？」

「目が違つわ」

淀みない返答に俺は白状した。

「美容師に決めました。なんだか俺が求めてる何かがある気がして」
「目的は大切だものね。素敵な志だと思つわ。美容師ってことは専門学校に通うのよね？どこかもつ決めてあるの？」

「東京の専門学校って決めてます。だから同時に美容院に就職しようって考えてます。今考えてる通信制は十月に入学になるみたいですから、それまでに貯めたお金を入学金に当てようって。足りない分

は当分は親に借りようかと。家賃などもありますし。とりあえずはまず、働き口を探してます。都内に面接をしてくれるところがあるといいですけど」

「よく考えてるのね。見違えたわ」

「そうですか」

「お世辞は言わないわ。私を感じたことを言っただけ。胸を張りなさい。君は自分の選択を誇るべきよ。だから」

同時に、ホームに電車が向かっている知らせが響き渡った。それによって彼女の言葉はかき消され、聞く機会はもうなかった。イク二さんはもう俺を見ていなかったからだ。俺は聞き直そうという気力がもてず、ただ黙って彼女と同じ方向をじっと見つめた。さっきの知らせが肉声だったから聞き取りにくかったけれど、もうそろそろだろう。別れを告げれば、この先イク二さんと会うことはもうない。そんな確信があった。知らせと共に電光掲示板が赤く灯る。注意などの文字が眩しいくらい、薄明るいホームの中で輝いていた。不意に彼女が自動販売機に足を運んで、缶コーヒーを二つ買ってきた。

「はい、これ饅頭」

「どうも」

しかし手渡されても、彼女がタブを開けないから、俺も機会がなくて飲まず仕舞いだった。

そして電車がやってきた。

「ありがとう。ここでの滞在は面白かったわ。色々と案内してくれてありがとう」

「こちらこそ。色々と面白い話を聞けて勉強になりました」

「嬉しいことを言ってくれるわね。君の夢が叶うことを祈ってる。

……さようなら」

テロップを踏んだ彼女はもう振り返らなかった。俺もただ見送るだけだ。

やがて、警告の声が聞こえてきた後、空気が抜けるような音と共に

にドアは閉まった。同時に少しずつ速度を上げながら電車は遠ざかっていく。

そして電車が視界から消えたとき、タブを開けて、啜る。すぐに顔をしかめて目を瞬いた。

ブラックはやはり苦い。でも、目覚ましにはちょうど良かった。

春を匂わせる頃に神楽からデートの誘いがかかった。初めての二人つきりだった。場所は彼女の希望でM市の大型商店街とその周辺である。

最初は、どこかで賢志たちが隠れているのかと思っていたが、デートを始めてからしばらくしても、影の一つも見当たらないからその線は薄いと結論づけて、神楽にできるだけ真っ直ぐ視線を向けて付き合うことにした。

自分自身、この考えがすでに神楽に興味がないことだと、わかっていて、なんとなく疲労を感じた。

デートのルートは、以前のダブルデートだった頃と大きくは変わっていない。店舗も大きく変わっていないから当たり前ではある。

しかし神楽の気分だけは違った。基本的にあの人見知りでわがままなのだが、どこことなく浮ついている気がする。俺と自分と前方しか見えてない気がする。そんな姿勢だった。

それに今日の神楽はかなり気合いが入っていた。以前も気合いが入っていたが、今回はアクセサリーの他に、身だしなみにも繊細なまでに気を遣っているように見えた。

以前との違いは三件目のレディースの服屋に入ってからわかった。薄い化粧は以前と同じだが、唇の色が違った。うっすらと光沢のあるピンク色の口紅だった。中身に似合わぬ清楚な顔によく合う上品な色だ。だから、服装も袖口のゆったりしたワンピースで、ストールのようなものを肩に掛けているのか。

すごく今更気づいた。俺としたことが、うっかりしてた。

すると、今まで服の上から気になった服を当てていた神楽が、不安そうな顔をして俺を覗き込んできた。こうした体の距離がないのは、絶対に福本の影響だろう。

「似合わないなら似合わないって言って。……もしかして、遠慮してる？　前に私がわがまま言ったから？」

「違う違う。今日の神楽が良いところのお嬢様にしか見えないから。ちよっとかしこまってみようかなって思って。お抱え運転手風に」言葉通りの冗談に神楽は目を細めた。

「じゃあ、ちよっと甘えて、お願いしてみようかな？　演技に自信ある？」

神楽らしくない返しに俺は内心驚きながらも笑って答える。

「ないけど。ちよっと待て。練習してみる」

そう言って、神楽の前でそれを披露してみると、何とも言えない顔をされた。不器用で、正直な奴だ。美帆とかなら、ここで一言ある。余計なこともあれば、上手すぎて吹いてしまったりもする。まあ、あれと比べるのは酷だし、同じにしては失礼だろう。

「……やっぱり、やめておく。上手く言えない」

それは俺の助け船か、それとも神楽のノリか。判然としない答えだった。やっぱり、美帆とかなら追求するのだが。

神楽は誤魔化すように笑っている。やっぱり神楽らしくなかった。

「それで、この服はどう？　似合う？」

「いいんじゃないか？　でも、それだと似た服ばかりじゃないか？　それだと、これなんかどうだ？」

差し出してみた服を神楽は思案げにじっと見て、不機嫌な顔をした。

「どうして、いつもいつも良いもの見つかるかなあ。ていうか、よくさくさく動けるよね、こういう店で。ふつー、男子って気後れしない？　もしかして、私ってこどもっぽい？」

「子供っぽいって？」

神楽は言い辛そうに、

「……選ぶ服」

「いいんじゃないか？ センスなんて人それぞれだし」

俺なら勧めないなんて言葉は飲み込んでおく。神楽は不機嫌な顔のままだった。

「……試着してくる」

意地を張るような声を置いていった。

試着室から出てきた神楽は俺の見立て通りよく似合っていた。これは満足のいく出来だ。

すると唐突に、神楽が勘ぐるような顔をして、

「ねえ……。田沢さんが言っていたのって、もしかしてほんと？

夏目くんは女子を着せ替えするのが趣味だって」

「すげえ失礼だよな、それは？ マジで信じてるのか、そんな与太話？」

「そんなことないよ！」

そんなわかりやすく焦らないでほしい。思っていることが明らかにすぎて、余計ざっくりくる。

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、神楽はますます焦りを口走ってきた。俺は呆れ顔で、

「わかったから、その辺で落ち着いてくれない？ あと、そんな人聞きの悪い発言は忘れてくれ。そしてこれから真に受けるな」

神楽は神妙に頷いた。しかし里織は最悪だ。確信犯だろうから余計に最悪だ。

途中そんなハプニングに遭ったが、それからは滞りなくデートは楽しく弾んだ。以前のようにすぎたわがままがないからだと思う。

やがて、帰りの電車を心配する時間帯になった頃、神楽が不意に提案した。

「お城のほうに行かない？」

「お城？ 別にいいけど、何かあるのか？」

「何もないけど、行きたい」

絶対断らせないという妙な気構えを感じて、大体見当がついた。

だから、俺はそれ以上追求せずついて行くことにした。

M市の城へ行くには、橋を使うしかない。もしくは外堀を泳ぐか。また城のある敷地には、美術館などといった公共施設がいくつか鎮座しており、今の時期はどうかは知らないが、展示などをしたりして面白い。

俺たちがやってきたのは、憩いの場として使われているらしい石垣の下だ。木々が立ち、芝生のように雑草が生え、申し分程度にベンチが置かれてある。それでも人の姿が意外と多い。

俺たちもその一人として、ベンチに腰掛けて涼むことにした。でも、隣で肩を強ばらせている神楽にそんな目的はないだろう。俺としては、できるだけ早くしてほしいと思う。

「あ、あのさ！」

「何？」

震えているせいか妙にイントネーションのおかしい第一コンタクトに、自分から顔を赤くして自爆してる神楽に、一応気を遣って促した。けれど内気で、しかもいっぱいいっぱいな状態に陥っている神楽が気づくはずもなく、ますます狼狽えていた。

「えと。ど、どう言えばいいのか、わからないのだけど……」

一言で済む話である。というか、神楽のへたれ具合が賢志とかぶる。

「せっかく、ここに来たんだから、言いたい！」

外見がこれなのに男っぽい口調なのは、ギャップがあつて良いという男もいるんだろう。経験があると妙なところで余裕だ。

「す、すすすすすす！」

ここまで緊張の極まった奴は初めてだった。吹き出す前に言い切つてほしい。

「すすすすきです」

「悪い。付き合えない」

「……………」

途端、下唇を噛むほどに顔をしかめて俯いてしまった。居心地が

悪いが、好きでないのだから断る返事ぐらいしかない。

「お前の何かが悪い訳じゃないよ。自分の悪いところを直してるところは、素直にすごいと思う。ただ、女として好きとは思えないんだ。いや、付き合うつてことが今は考えられない。そんな余裕がないんだ。自分がしたいと思ってる職業にしか頭が向かない。だから、悪い」

言いたいことは全部言った。もし神楽がわがままを行使しても、諭すだけだ。無理なら福本を呼び出す。その際、迷惑を掛けるなんて考えない。

しかし、神楽は黙ったまま頷いた。俺はまさか納得するなんて思ってもみなくてびっくりした。今日のデートで一番の驚きで、印象的な瞬間だった。

断ったときから賢志に呼び出されるのは予想の範疇だった。誤解を招かれても嫌だから、素直に応じて、家を出た。

賢志が指定した場所は某うどんチェーン店だった。食事時からずれた時間帯だからか、店内にほとんど人の姿はない。壁際の席に腰掛けた賢志の背中に声を掛けて、隣に座った。セルフサービスの店で、すでに賢志はトレイに底の深いお碗を載せてうどんをすすっている。

「食わずに待てよ。もう食ってるのか」

「さっきまで春に連れ回されていたからな。食わないと喋る気も起きない。話長くなるからお前も食えよ。三時のおやつだと思えば食えるだろ」

「どんなだよ」

二人前よりはありそうな量のうどんをおやつとは言わない。俺は結局注文せず、賢志から用件を聞き出した。

「どうせ神楽のことだろ？」

「それ以外で呼び出すことがあると思うか？ 絢の件が意外だった

から、聞きたくてな。別に俺も春も怒ってないし、文句もないからな。誤解するな」

「それで？」

「見た目は可愛い方だろ。性格だって矯正すればいいわけだし。実際、お前に告白を断られても前みたいな癩癪は起こさなかったろ？」

俺も春も、今回あいつがお前のことを好きになったのは良い契機だと思ったけど、別にそのためは是が非でも付き合ってもらいたいとは思ってないぞ。それで絢がわがままを言うのなら、結局あいつ自身に何の変化もなかったことだ。お前の責任じゃない。だけど、絢は変わった。自分の思い通りにならなくても、相手の意志を尊重して我慢することを知った。だからこそ、お前が断る理由が思いつかなくてな。あれなら要領の良いお前のことだ。上手く付き合えるだろ。付き合いきれる保証はないけれど、それも良い経験だ。付き合いの浅い春は気にも留めなかったが、俺はすごく気になった。できれば聞かせてくれないか？」

「単純に俺の好みじゃなかった。それだけの理由。そんなものだろう？」

「ないこともないが、でも違和感があるんだよな。なんて言えばいいのか、思いつかないが。田沢を呼べば良かった。……前のお前はなんだ。軽々しかった、いや……。やっぱり軽々しいであってるか。しかし足りないな……」

苦虫を噛み潰したような顔をした賢志は散々頭をひねったようだけれど、結局、うどんを食べ尽くしたのを機に諦めたのか話題を変えた。

「もう少しすれば俺たちも三年だな。どうせお前は就職だろ？ それ関連の集会でもしてるのか？」

「くそつまらないのをもう何度もしてる。毎度同じことを言ってる率悪いよな」

「教師なんてそんなものだろ。俺のところは夏休みは全て夏期講習で埋まってる。しかも塾じゃなくて学校のだ。その辺の低レベルな

塾より西高の教員が指導した方が効率が良いと言つが、むしろ塾に行つた方が効率がいいと思うがな。それに根を詰めすぎるとかえつて効率が悪くなる。そのあたりがわからないあの教員どもは揃いも揃つてへぼだな」

賢志がここまで口汚く罵るのも珍しい。それほどにストレスが溜まつているのか。

「それはともかくだ。そんな話をしにきたんじゃないんだ。やつぱり、気になるぞ恭一。お前、他に理由はないのか？」

「ない。どうやってもそれ以上何も言えないからな。そういや、まだ部活続けてるのか？」

「夏に入る前に引退する予定だ。俺は気にしてないから、もう少し延長してもいいんだがな。春が俺の進学を気にして、早めに引退を切り出したんだ。あいつの熱意を考えれば秋のコンクールに出店してからでも遅くないと言つたのに。案外心配性だ、あいつは。お前からそれとなく言つておいてくれ。俺がこれ以上言つたところで頑なになるだけだ」

「まあ、それとなくな」

「お前の口で俺の気持ちにくみ取ってくれるといいんだかな」

「意外と苦労してるんだな」

その言葉に賢志は苦笑いを浮かべた。

「頼み事するなら、今からカラオケに付き合えよ」

「はあ？ 待て、なんでそうなる。お前一人で行けばいいだろ。俺は疲れてるんだ」

しかし賢志が嫌そうな顔をするから、俺は呆れ半分からかい半分に言葉で押さえつける。

「俺に力を借りたんだから、これぐらい付き合えよ。というか、これでチャラにできるんだから安いものだろ」

「結果を出してから言え。もし失敗すれば俺は大損だろ」

「俺を信じる」

「信じたって失敗したことも相当あるだろ！」

「今回ばかりは俺も真剣に取り組んでやるから、行くぞ」

「だから信じられるか！」

そんな攻防はしばらく続いて、結局賢志は諦めた。口げんかをし
て俺に勝てたことがないのに、諦めの悪い奴だ。

「どうして恭一くんがいるかな？」

最初から里織はかなり不満そうだった。美帆が笑顔で取り直す。

「私が呼びました」

訂正、かき回した。知らない間にいい根性をつけてきてる。まず
間違はなく里織の影響だろうが。里織は驚くことなく、俺をじっと
睨み続ける。

「来週にせんぱいが面接行くらしいので、お祝いしようよ。も
しせんぱいが落ちてもいいように慰め会も含めてます」

「さらっと言うな」

「しかし落ちる確率だってあるわけですし。完全にお祝いなんてし
ましたら、仮に落ちたときすぐくせんぱいに悪いじゃないですか」

悪びれた様子なく美帆はからりと言う。そこまで言われると、文
句も言いにくい。しかし、言いたいことははっきりとっておく。

「落ちる確率なんてこれっぽちもねえよ。余計なお世話だ。そもそ
も受かった後に祝えばいいじゃないか。その方が確実だろ」

「だからって私の部屋でしなくてもいいと思う」

里織の言うとおり、今、俺は里織がM市で借りているマンション
の一室にいた。まさか里織の部屋だとは露知らずに尋ねると、絶句
した里織と妙にうきうきした美帆に出迎えられた。それからずっと
里織にうじうじと文句を言われている。当然俺だってここまで迷惑
がられたら出て行きたいのは山々だが、美帆がこっそり牽制をかけ
てるから部屋から出られないのだ。

そもそも、美帆と二人だけのお泊まり会と聞かされて、あっさり
承諾する里織にも責任があるだろう。そこまで仲が良かったのか、

お前ら。

美帆から聞かされるに、この八畳のワンルームという間取りは里織の希望らしい。里織の両親はもう少しランク上のマンションを勧めたが、若い内から贅沢していると親離れができなくなるという里織の意志によって、妥協案としてこのセキュリティが完備されたワンルームマンションとなった。

ちなみに、ここでパーティーを開くの、かなり里織をなだめなければならなかったのは言うまでもない。

料理を作るのは今回のパーティーの発案者である美帆だ。飾り付けは部屋の主である里織との協議の末に禁止らしい。玄関から部屋に入るまでの細い廊下に備え付けられた小さなキッチンで、美帆は軽快な音をたてながら料理に勤しむ。途中、いやいやながらも里織が手伝い始めた。だから俺も手伝いを申し立ててみるが、やんわりと「せんぱいが主役ですから手伝ったらだめですよ」と断られた。すっかり手持ちぶさただった。

「呼ぶならある程度出来上がってからにすればいいのに。俺がすごい暇じゃんか」

「すみませんー。思い立ったら吉日とばかりに決めましたから」

「確かに早すぎだったよな。三日ぐらい前に決めたことなのに、もう準備完了みたいだったし」

それもその次の日には、このマンションと部屋の番号まで書かれた地図を用意するという迅速な行動力。

「他の面子も呼んでるのか？」

「まさか、呼んでませんよ。振られて傷心している人をうつかり呼ぶほど抜けてません。けんじ先輩や福本さんにはそちらをお願いして貰います。このお祝いには、せんぱいと私とさとり先輩しかいません。せんぱいは私のことをどう思っていたんですか？　もしかして抜けてるように見えました？」

「ん、いや」

「そうですね」

というか、やっぱり美帆の耳にまで伝わってるのな。あのお喋りめ。脳裏にお気楽者の顔がよぎった。

すっかり外が暗くなった頃になって、やっと料理が部屋に運ばれてきた。中央の足の低い机に結構な種類の品々が置かれた。

「意外と多いな。つか美帆、料理できたんだ？」

「失礼ですよ。せんぱいに頼り切ってるのがいやだから、お母さんに教えてもらったんです」

「女心がわからないの？」

拗ねる美帆を援護するように里織が呆れて言った。

「あー、すみません。じゃあ、早速食うか」

まずは手前の料理に箸を伸ばして、口に運ぶ。すると、俺は目を丸くした。

「マジでうまい。すごいな、俺のところの母親よりうまいぞ」

「よかったです。たくさん練習した甲斐がありました」

俺の口からぼろぼろ出てくる賞美に、顔全体をほころばす美帆はまるでこどもみたいだった。

ある程度食事が進んだあたりで、里織が不意に尋ねてきた。

「美帆ちゃんが喋ってたんだけど、面接をしてくれる店が見つかったんだって？ 東京なんだ？生活できるの？」

そんなに俺は考えなしに見えるのですか？ そんな顔をして俺は答える。

「それは失礼じゃないか？ 聞ってる限りの給料でちゃんと生活できるから。それに貯めてる金もあるし、最初の給料がでるまでの生活もできる」

「ふうん？」

里織はつまらなげな顔をして、

「仕事しながら美容師の勉強するらしいけど。両立できるもの？」

入学はいつあるの？」

「できるできる」

信用できないとよく言われる軽い調子で口ずさみ、

「入学は十月。それまでに出来る限り貯金して入学金に当てる予定」
「それは美帆ちゃんが言ってた。それにしても十月からって、微妙な時期に入学式があるんだ」

「俺は通信制なんだけどね。それで遅いんだよ」

「ふうん」

またしても里織は気のない返事をする。しかしそれとは別に、俺は残念な気持ちがむっくりと頭をもたげる。

「面接してくれるところ、東京といっても田舎の美容院なんだけだな。贅沢は言えないけど、ちょっと残念。まあ、二、三年後に大きいサロンに行く予定だけだ」

「根拠あるの？」

「さとり先輩……」

身も蓋もない言い方に俺も美帆も苦笑する。確かに根拠はないけどな。もう少し気を遣ってほしい。

けれど、里織はそんな反応にも大した興味を示さず、料理を一つつまんで飲み込む。

「私には関係ないことだから、恭一さんの好きにすればいいけど。美帆ちゃんを巻き込まないでよ」

「俺はそんなことしねえよ」

いい加減、その勘違いをやめてほしい。

「面接は来月でした？」

「六月の上旬。店長ともう一人が面接してくれるって。今から服選びに余念がなくなつて大変だ」

「そこで服装に気を遣うところが、せんぱいですねー」

美帆はくすりと笑い、里織はどことなくしかめたような無表情で言う。

「何を聞かれてもいいように、そのあたりのことも考えておいたらどう？ いざ予想はずれのことを聞かれて慌てると、みつともない無様」

「まあまあ。せんぱいだって、せんぱいなり考えているんですよ」

微妙な物言いと言われると、それはそれで困るのだけれど。

「そういえば、もし合格したら、家具なんかはどうするんですか？
やっぱり東京で買うんですか？」

「そのつもり。ただ、そうすると押し入りに押し込めてある、雑誌
や服をどうやって処分しようかなって思ってるんだよな。そこも悩
みどころ」

「ユニクロで買いきななんですよ、せんぱいのそれは。雑誌はいつ
までも残しておくからかさばるんです。あきらめも肝心ですよ」

もったもな意見に俺は反論ができない。せいぜい拗ねるように言
うぐらい。

「わかってるよ。でも、口で言うほど諦めがつきにくいんだよ。わ
かってくれ」

「わかりますけど……。まあ、かさばる原因は買う雑誌に男女性
関係ないっていうのもありますよねー」

「そのせいでたまに私も美帆も助かっていたっていうのが癪。払拭
したい過去よ」

また随分な言い方だ。

「助かっていたらもう少しぐらい感謝してくれよ。俺への態度をもっ
少し優しくするとか」

「自分がしたときだけ恩を着せてくるな。これで十分譲歩してるほ
う」

「冗談だつて。というかそれで優しいのかよ」

「そう。見えない？」

「見えない」

ふんぞり返っているところが余計にだ。すると里織が盛大に溜息
をこぼした。その仕草に昔の彼女が垣間見えたような気がした。い
かにも面倒くさがりな溜息だった。

「恭一くんはわかってくれないんだ。仕方ないか。わかってくれな
いなら、それでもいい。普段は気が利くのに意外なところでにぶい
恭一くんらしい」

「もう少し詳しく教えてくれよ」

気になって求めてみるが、里織は誤魔化すような顔をするから、ますます意地になって尋ねてみる。それでも結局教えてはもらえなかった。機嫌を損ねた俺は里織を一瞥して話題を変えた。

「お前はどうかんだ里織。まだ五月だけど、推薦の下準備みたいなのはないのか。いつあるんだ、推薦は？」

素直に教えてもらえるとは思わなかったけれど、意外と里織はすんなり教えてくれた。

「出願の準備は二学期に入ってから。それまでは面接と英語を練習したりするぐらい。といってもそれが一番大事なんだけど。英語のレベルが全然違うんだもの。外国語大学を受けた先輩の残してくれた資料を見て、そう感じたわ。実際勉強してみると追いつけるのがやつとみたいな。それに私以外にも他校にも推薦に望む人はたくさんいるから。ストレスがかなりたまる。試験日は確か十一月だったと思う。……憂鬱だわ。美帆ちゃんも覚悟した方が良いわ」

「覚悟しておきます」

きちんと理解してるのかわかりにくい笑顔で美帆はそれに返した。でも、こいつのことだから進学も就職も難なく合格しそうだ。

すっかり料理を平らげて、美帆が淹れてくれたお茶を全員で啜る。

面接の結果は六月下旬に店長から電話で報告された。それまで、実はどきどきしていた俺はうわずった声で応対して、合格の言葉に思わずガッツポーズをするほど喜んだ。

ついでに、手当たり次第に次々と友人にメールを送って無理矢理分かち合った。返信があつたのは美帆と賢志、他友人たちだけだった。例によって里織は無視。福本と神楽は送らずに置いた。美帆は素直に喜んでくれたけれど、賢志は言葉身近に皮肉だった。

期末テスト明けの休みに俺は美帆をファミレスに誘うと、ついでに賢志たちも呼ぶことになった。そうしてファミレスに集まった俺

と美帆と賢志、福本に神楽はそれぞれ注文を終えて、里織が来るまで食事と会話で時間を潰すことになった。

「無事、合格おめでとう。将来は美容師なんだよね。そのときは私も切ってもらおうかな。ねえー、あや？」

「楽しみ」

「先は長そうだけどな。専門学校は二年間だったか？ その間に免許とれるのか？ 曲がりなりにも国家資格だろ？」

「夢がないな。それに水を差すの禁止」

「本当のことだろ」

しかし賢志は真顔で返すとコーヒーを啜った。福本はそんな賢志を困った子供を見るような笑顔を向けて、話を戻した。

「面接ってどんな感じだったの？」

そういえば詳しい話は美帆や同じクラスの友人にしか話していなかった。

「かなりゆるい面接だった。飲み物何がいいかって最初聞かれたし、本当に拍子抜けだった。一応、正装風な格好で望んでみたのだけれど、あまり意味がなかった気がした。

すると、美帆が余計なことを言う。

「こんなこと言ってますけど。合格だって言われるまで、かなり心配していたんですよ。同じクラスの人に、いい加減にしるって言われてもずっと頭を抱えてました」

「あははは。意外と心配性なんだ」

「普段、自信家なくせに、いざつとときに足がすくむんだよね、こいつ。そんなときはいつも俺を付き添いに強要するんだよね。それに人の話を聞かないところもあるから、失敗だって多いし。結構、人に迷惑かけてるよな？」

「へー？」

福本と神楽が好機の眼差しで聞き入ってる。俺は気分を損ねて舌打ちする勢いで文句を吐く。

「あることないこと話さないでくれない？ お前も失敗多いだろ」

「本当のことを言われたからって怒るなよ。余裕のない男は嫌われるぞ」

「うるぜえよ。お前には言われたくない」

「まあまあ。そんな足の引つ張り合いはその辺にしてください。それに二人だけでじゃれ合わないでくださいね。まぜられない話はつまらないです」

「じゃれてねえよ」

そう口にする、美帆は意に介した様子なく笑う。

「東京ってどうだった？ やっぱ、道路が人や車で埋め尽くされていた？ 通りの両側全てに店舗が隙間なく入っていてすごい賑わいなんだよね？ 夜はとても綺麗なんだよね？ いろんな色の光で夜が照らされていて、街全体を華やかに彩っているんだよね？」

なんとなく昭和の東京が脳裏をかすめた。間違っではないんだけど、福本の脳内でかなり脚色されていそう。福本の言葉をそのまま持ち上げるのに気が引けたけれど、

「そんな感じだな。むしろちゃや人いたよ。深夜でも人の流れが途切れないのがすごく、胸が高鳴りっぱなしだった。東京の空気は濁ってるって言うけど意外とそうでもなかったな。煙草のマナーもよかった。やっぱり田舎と都会は全然違うな。服だって中途半端でもヤンキー丸出しなてかてかやドクロまがいでも、ジャージでも、ださくもなかった。みんな外も中もあか抜けていた」

「鼻の下がだらしなくなるくらい浮かれていたんだな」

「またもや賢志が話の腰を折るようなことを言うが、気にせず続けた。」

「かなり暑かったけど、そこは東京で暮らせることを考えれば許容範囲だし」

「すごいなあ。やっぱり夢を持っていると気構えも違うんだあ」

福本の素直な感嘆が心地よい。たとえば、一足先に美帆に合格祝いをされていてもだ。

むしろ祝ってくれる人が増えたのだから喜ばしいことだろう。

「なに照れてるんだよ。乗せられやすい奴だな」

「浸っているときに余計なことを言うなよ。空気読めよ」

「読んだ上に言ってるんだが」

「なおさら最悪だな」

いつにも増してしつこくからんでくるから、さすがに俺も眉をひそめた。

「お前、何かあったの？ 今日やしつこいぞ？」

「それはお前、受験生の前で受かったと騒がれたら、気分も悪くなるだろ。こっちはまだ受験勉強のまっただ中なんだぞ」

それは確かに氣遣いに欠けていた。うっかり騒ぎすぎたと思う。

「悪かったけど、それでも少しぐらい分かち合っても良いだろ」

「よかったな」

口元が引きつった。まあ怒るほどでもないが。こいつは子供なのだろうか？

それからしばらくしてやっと里織が到着した。手を振って居場所を教える美帆に促されて、里織はその隣に腰掛けた。

夏休みに入って、それ以降では、こうして集まるなんてことはほとんどできないだろう。合格通知が今の内に届けられたのは良いタイミングだったと思う。

「はい、どうぞ。談笑してるんで、さとり先輩も何か食べてください。みんな、もう一足先に食べてしまいました」

「ん、わかった。仕方ないもの。一時間近くは待たせたんだから。謝罪するべきは恭一くんのはずよ」

メニューを受け取った里織は流し目に俺を睨む。

「悪かったって。メールで済ました俺が悪い。でも、それならいつも携帯をもっておけよ。何してたんだ？」

電話がつながらなかったのだから、仕方ない処置であるはずだ。

責任は里織にもあると言っと、不機嫌そうな顔で、

「いちいち、どうしてあんたに教えないといけない？ 私だって忙しいときがあるんだから。あんたみたいに暇じゃないの」

「俺だって、いつも暇な訳じゃないんだけど」

「なら聞くな」

美帆が取り直すように里織の持つメニューに顔を寄せた。

「もう決まりました？ 私はこのパフェにしようと思っているんですけど、さとり先輩は何か見当つけてます？」

ここからだと思えないが、どうやら里織の開いてるページはデザート系らしい。

里織は真顔で聞き返した。

「すごくカロリー高いのに、美帆ちゃんは気にしないのね。私はそれはパス。食べたらしばらくは、カロリー計算を綿密にしないといけない。野菜ばかりの食生活を、私と一緒にしてみる？」

「すみません……」

乾いたように笑う美帆はもう一度メニューに目を落として、

「このセツトはどうですか？ カロリーもこれだけですし、お財布にも優しい値段ですよ？ それにこのケーキはさとり先輩の好みっぽいですし」

そんな感じで美帆と里織がメニューにのめり込んでいる間に、神楽が不意に声を掛けてきた。

「夏目くんはもうここに帰ってくるつもりはないの？」

「どうだろう。……多分、もうないな」

多少の無理でも押し通せるのが若さだ。なら、今の内に東京の生き急ぐような空気にまどろんでおきたい。年をとってからでは遅いのだ。東京に行って来てそれは確信の域にまで達していた。

案の定、神楽はどこことなく寂しそうな顔をしていた。それを福本が優しく諭す。

「会いたいなら、頑張って会いに行けばいいじゃない。遠い場所じゃないんだから。お金を貯めればいつか行けるでしょう？ それにもしそのときナツくんが彼女が来ていたら、隙を見て奪えばいいじゃない。それぐらい意気込んでおかないと、ナツくんは無理だよ」
なにやら不穏なことを言っていたが、聞いてない振りをしておこ

う。神樂がちらちらと俺を窺っていても気にしない。

「全くこいつのどこがいいのか俺にはわからないな。どうして昔からこつ女にモテるのか」

「へらへらしてるからよ」

メニューに目を落としたまま、里織がぼそりとこぼした。

「うるさいよ」

結局、里織と美帆が注文したのは、ケーキとコーヒーのセットで、すぐに運ばれてきた。その運んできたウェイトレスの顔をちらりと見て、そういえば誰かがここのウェイトレスは可愛いと言っていたことを思い出したが、言っていたほどでもなかった。

「そういえばここのケーキって結構本格的だってクラスの子が言ってたよ」

そう言われてみると二人のケーキに安っぽい雰囲気はなかった。

他の女性陣が凝視する中、二人とも気にした様子なく、切り崩した部分をフォークで刺して口元に運んだ。

美帆は口元に手を当てながらにつこりと微笑み、

「ほんとにおいしいです」

「ファミレスでこれってかなり上等」

「さとり先輩、さすがにそこは素直にいいって言いましょうよ」

「ここで出すには少し勿体ないと思う」

「じゃあ、聞いたとおりにおいしんだ。今度また来ようね、けんじくん」

「そんな暇があればな」

「あれ？ 私はもう結構気楽なんだよ？ 芸大の推薦もらえそうだし。あとは、けんじくんの頑張り次第。私の期待に応えてね」

「応えられたらな」

素っ気ない言い方の賢志に俺は面白がってつついてみた。

「そんなのしてみないとわからないだろ？」

「そうです。根性です」

「うるさい」

便乗する美帆を含めて賢志が睨んだ。俺はますますからかいを強めた。

「そんなに苛々するなよ」

「誰が苛立たせてるんだ」

福本と美帆が笑う。美帆はともかく、福本も俺と賢志の付き合い方に慣れてきたみたいだ。

そして、談笑も一段落したっぽい空気になったとき、福本が待つてましたと言わんばかりに高らかに声を上げた。

「さて、そろそろ場所を変えない？ カラオケかボーリングなら、談笑するもよし遊びもよしじゃない？ みんなはどう？」

その福本が発端の提案に、意外とみんなは肯定的だった。里織や神楽にすら目立った不満はなかった。そして話し合った結果、ボーリングになった。神楽も自分から意見をするようになったから、話し合いはスムーズに進行した。告白に決着をつけた件から、少しずつ変わってきているみたいだ。あの癪癢はここ最近見ていない。賢志に言われるまでもなく、良い傾向だとわかった。

散々美帆に愚痴ったが、卒業式までの毎日はかなり長かった。精神的にとても苦痛だった。

早く卒業したいと何度も願い、耐え難いほどの苦痛を味わいながらここまで来た。

しかし、だからこそ、感慨深いと思えたのは卒業式を迎えられた余裕かもしれない。

卒業式が終わったとき、もうこんな監獄と思える高校にもう通わなくてもいいのだと、体に羽が生えたような気がした。

いや、その気持ちは自由登校になった頃からあったと思う。

バイトの都合で二月まで引っ張ってきた教習所に、着納めというか、これから先も着る機会はないのだから、供養と称して学生服で通ったのがその証拠だ。もちろん、帽子やマフラーで他との差別

化は図った。

あと、制服の第二ボタンをほしいと言う奴は誰もいなかった。美帆も欲しがる様子を見せなくて、冗談っぽく聞いてみたけれど、冗談として受け取られた。まあ、虫の良い話だと、一応自覚はしているけれど、ちよつと傷つく。

二月中に教習を終えて、高校卒業後に運転免許センターに行つて、本免試験に合格するだけになった。賢志と福本もその域まで来てたと聞いていたけど、試しに受験ということで電車とバスで向かうと福本が賢志に寄り添うという形で見つけたときは、色々言いたくなつた。それでも一番は、かなりの受験者数で、見つけるつもりもなかったのに、腐れ縁というしぶとい縁で出会つたことに、お互い呆れた。

補足として、俺だけ合格するのに一週間ほどかかったのは笑い話にした。それでも、運転で失敗し続けている神楽よりマシだろ。不用意に口にすれば、拗ねるから言わないけど。

俺が今月の十六日に一足早く町を出ることは、機会があつた順に他の友人を含めて、全員に言つてある。

なら、もう一回集まろうとも約束してある。

ここまでくるのに、少し前までは遠回りしているように感じていた。まだ将来のことで決めあぐねていたくせに、現状にばかり不満を抱いていた。意味がないことだと知つていたくせにずつとしていた。

そんなときに、イクニさんに出会えたのは幸運だった。東京へ行くのに、都会は出目金の集まり、田舎はやせ細つた金魚の集まりだと知るのに、彼女の言葉は欠かせなかった。

だからといって、彼女の言いたいことの全てがわかつたわけではない。どれだけ同年代よりも見えてると言つても、彼女に比べれば圧倒的に経験が足りない。やっぱり俺もまだ子供なのだと思ひ知らされる。

卒業したから、元からなかったけれど平日でも気兼ねなく、最後ぐらいということで半ば強引に希望を通したカラオケに、俺たちは集まった。面子はいつも通り、美帆と賢志と里織と、福本に神楽だ。「みなさん、合格おめでとうございます。自分のことじゃないのに、みんなが希望通りの進路に行けて、なんだかうれしいです。さとり先輩、けんじ先輩、福本さん、神楽さん。卒業しても、こんな風にまたみんなが集まりましょうね」

ただ一人の在校生である美帆が労いをかけてくれた。

賢志が妙に慚然としているが、照れくさいからだろう。つつくと、案の定露骨な反応をしてくれた。

里織は労いの直後で美帆と抱擁を交わした。相変わらず美帆はくすぐったそうだ。

福本はやっぱり写真を撮っている。賢志から聞く限り、コンクールの後で引退してもずっと一眼レフを持ち歩いているらしい。

神楽はぼつと座っているかと思えば、顔を赤くしていた。内心で嬉しがっているのかもしれない。一年も経つと神楽の内心がよく計れるようになった。案外、いや多分意外ではなく、こいつはわかりやすい。そして、こいつがこの中で一番変わった。多少は意地っ張りだが。

俺はくるくると周囲に目を配りつつ、机に積み重ねられた分厚い本をめくっていく。めくるまでもなく、曲は決まっているが、なんとなくだ。ぺらぺらとめくった後、俺はリモコンを手にとって曲を入れて、マイクをとった。

せつかくの集まりなのだ。感傷的になんてさせるつもりはない。カラオケは大いに盛り上がった。あそこまでアニソンを堂々と歌える里織はすごいと思ってしまった。気が違ったのだろうと思うことにした。

十六日になった。住所変更のための書類などはちゃんと持ってい

ることを確認して、持っていく荷物も確認した。身だしなみは大丈夫。肌は元々強い方だ。

予約した夜間バスは、もう少しすれば来る。場所は国際ホテル。そこまで俺は徒歩で向かった。

到着したが時間はまだ少しあった。しかし暇な時間だ。教えている奴は多くないし、教えている奴には来るなど伝えてある。これまでに国際ホテルに縁がないから、中に入っても退屈なだけだ。そもそも入れるのか？

到着した夜間バスは、腹の部分に荷物を抱えるため、二階建て風だった。もしかしたら名称がそうなのかもしれないが、答えてくれる奴はいない。俺は荷物を渡して乗り込んだ。

座席は固い感触がした。修学旅行で乗るバスみたいな乗り心地だし、しばらくしてやってきた乗務員にコーヒーを注文した。

手渡されたカップに入ったコーヒーは薄い色合いをしていた。見た目通り不味かった。眠気覚ましにはなるかもしれない。そういえば、イクニさんの時も同じ感想を吐いていた。違うところは、あのときは飲んだコーヒーが苦かったぐらいだ。

イクニさんから聞かされた言葉は一年を経ても、意外と忘れず頭に残っていた。心に響いているのも少なくない。

彼女の言葉が反芻する中、俺の夢が叶うのか多少怖いと感じている。しかし、応援してくれる人がいるというだけで、俺は奮い立たせる。別に誰も応援してくれなくても、俺は大丈夫だと思う。でも、嬉しいなんて気持ちは絶対に湧かないだろう。そして気兼ねなく昔話もこれからの話もできる友人が、携帯の電話帳に登録されているだけで、心強い。

弱い人間ではない。しかし強い人間でもない俺は、東京でやっていけるのかは、やはり心配だ。強がるように言っても、結局は嘘をつけない。でも、夢を叶えたい。その気持ちは本当だ。

だから俺は、まだ残ってるコーヒーを飲み干した。

今の内に苦いものを飲み干して、耐性でもつけておこうと思った。

負けるつもりはない。

勝つつもりだと、適度に気持ちを引き締めた。

それはイクニさんの答えではない。

俺なりの答えだった。

第三話（後書き）

現在執筆してる投稿用作品は、もし掲載するとすれば、おそらく来年です。

楽しみにしてくれている方も、してない方も、来年に会いましょう。

追記、感想などを頂けると嬉しいです。

番外編を書きました。

良いところも悪いところも。

以後の、執筆活動の心強い糧になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6145o/>

一杯の珈琲

2010年11月28日19時25分発行